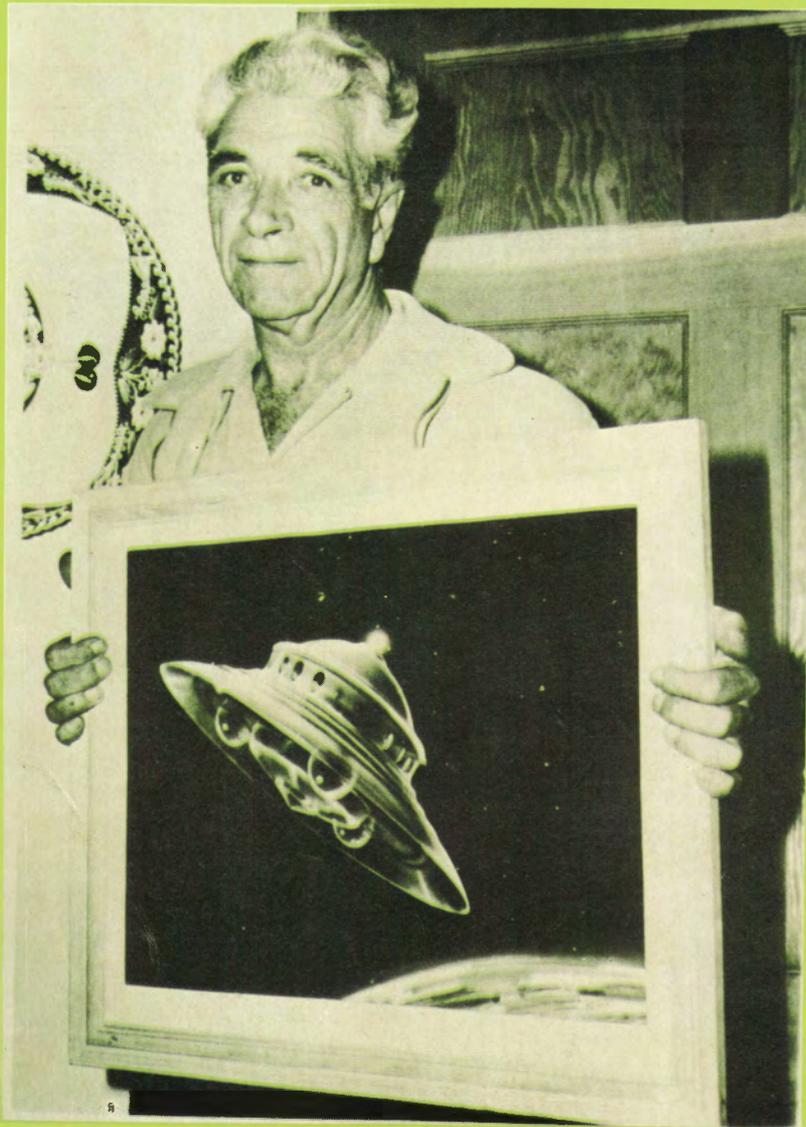


UFOと宇宙哲学の研究誌

GAPニューズレター

58



想念観察	1
進歩した思索家のために(2)	2
米国GAP本部訪問記(2) 第1部「きらめくビスタの星」(2)--久保田八郎	7
第2部「青きパロマーの空」.....	25
「生命の科学」で重症の心臓病が治った!	36
月例研究会案内	40
編集後記	41

★本誌掲載記事の内、海外関係のものは翻訳転載権取得済。
写真共禁無断転載。



GAPとは

GAPは「知らせる運動」という意味の世界的なグループ活動で、世界中の人々がUFOの真相について“知る”機会を与えられるべきであるという見地に基づいて1959年にジョージ・アダムスキーによって創始されました。彼の願いは「最大多数の人が現代の真実を発見して、来たるべき時代に眼を転じること、人間はすべて“コスミック・パワー”の子であり、そのパワーの諸法則が宇宙に遍満している事実を確信をもって知ること」にありました。この諸法則は他の世界(惑星)から来る友好的な訪問者からもたらされた“生命の科学”の研究と理解を通じて体得できます。

日本GAPの目的はUFOとスペース・ブラザーズ問題に関心ある人々に伝えることにあり、奉仕活動を通じて真実の解明と宇宙の法則の実践を呼びかけることにあります。その中心思想は次のとおりです。

1. この太陽系の他の惑星群から偉大な発達をとげた人類が地球を訪問しつつある。
2. 他の世界から来る人々はこの世界の政治家や科学者とひそかにコンタクト(接触)しており、危機にひんした地球に対して救援の手をさしのべている。官民を問わずスペース・ブラザーズとコンタクトしている人々が少数存在すると思われるが、通常その真相は洩らされていない。
3. ジョージ・アダムスキーがもたらした哲学は、人類の起源と未来の運命の真実を知るのに有益である。

本誌は他の団体・個人と対立するものではなく、政治・宗教と関係のない非営利刊行物です。本誌が読者に対して多少とも役立てば幸いです。

米国に——という傑出した大統領がいた。ある日忽然と世を去って行く。白昼夢の如きこの事件は世界を震撼させ、謎は巨大な黒雲に包まれて天空へ消えた。日月は流れて人々の記憶も薄れゆく。伝説は伝説を呼び起こし、歴史の里程標が増えては朽ち果てる——。

アダムスキーという宇宙哲学の指導者がいた。彼は大統領と親交があった。大統領は極秘裏にアダムスキーを最大のブレーンにしていた——。

人々は何も知らなかった。知ろうとしない大衆は盲目である。いや「死者の棺をかつぐ死人」である。そうだろう。地球は墓場なのだから——。

この墓場から脱出するにはどうすればよいか。答はただ一つ。マインド(心)を「宇宙の意識」と一体化させること。これしかない。他に全く方法は無い。古くからの因襲・伝統・習慣等で汚染された肉体の細胞群が一大軍団をなしてマインドを侵略し、蹂躪し、食ひ尽くしている。今や人間のマインドは哀れな餌食となり、悪魔細胞軍団の枷に縛られて身動きできない状態にある。

しかし内部にひそむ宇宙のパワーは活動しており、その枷をはずせと囁きかけてくる。因襲と習慣という深海の水圧に喘ぐ小魚にすぎない我々人間にもまだ救いの道は開けている。意志力によって枷を打破できるのだ。

習慣！ 悪習慣！ 習慣的想念！ こ

れらを除去することこそ光明への第一歩であり、真の自由を見い出すための活路である。

どうすればよいか？

ここに素晴らしい方法がある。自己の想念を観察し続けて、想念内容を次第に宇宙化させるのである。これを他人はやってくれない。あくまでも自分自身にかかっている。

習慣的想念(thought habit)に汚染されきっている人間が宇宙的な方向に進むための基礎段階として、まず自己の想念を直視してその内容や傾向を知らねばならない。すぐに他人を憎悪したりひねくれたりするクセがあるか、人間は弱い存在

観想念

宇宙的人間に
なる方法

で、金がなければどうしようもないと思ひ込んでいるか、肉体は単なる物質で、故障が起これば何はおいても医学の力を借りるべきだと考えているか、人生は儚い夢の如きもので、死んでしまえばジタバタしても始まらず、生活費だけ稼いで食って寝ていればよいと諦めきっているか——。

長い因襲によって培われたこのような習慣的想念を断固排除して、人間は万物のなかで最も創造主に近い存在で、永遠を

生きるものであり、心身ともに完璧に形成されている！という宇宙的想念を持続させるには、非宇宙的想念がわき起こるたびにそれを打ち消して、積極的に宇宙的想念に切り替える必要がある。これが宇宙的のフィードバックを持つための不可欠の要素であって、そのためには毎日、終日、自己の想念を手帳に記し、一日の終わりにチェックした上で自省しなければならぬ。こういう事を全くやらぬ人間は人間の想念レベルが向上することはまずないだろう。

具体的に言えば小型手帳を用意して、見開きの左頁を宇宙的想念の欄、右頁を非宇宙的(利己的)想念の欄とし、終日わき起こる想念をこの二種類に大別してかたづけしから記入してゆく。文章にして書くとは時間を要するので、簡単な記号で記してもよい。とにかく記録をしないことには比較検討はできないから、記録は重要である。

「そんな事をして何になる！」と一笑に付する人は、すでに地球を取り巻く低次元の一大習慣的想念帯を「至上唯一の」世界と思ひ込み、それ以上の高度な次元を見る眼を持たないのであるから仕方がない。また、想念観察をすれば狂人になると言う人もある。無理もない。すでに異常な世界に慣れていて、それを当然だと思ひ込んでいる人には、このような方法で異常な想念を正常にもどすことは苦痛至極だろう。

しかし、実行してみればわかるが、これこそあらゆる行法にまさる素晴らしい方法であり、しかも日常生活の場で実

践できる最良の自己訓練法である。第一日常生活で実行不可能な特殊な行法は我々現代人には不要である。働きながら行える方法でなければならぬ。

かつて日本GAPは「想念観察手帳」を製作して会員に頒布したが、資金不足で中止し、以来絶版となった。しかしこれは自分で簡単に作れるのである。これこそ宇宙の人間になるための不可欠の方法であり、手垢で汚れた小型の手帳には聖者への道を歩む足跡が燦然と輝いているのである。この想念観察法はアダムスキーが「テレバシー」の四十頁と、「宇宙哲学」百二十一頁で解説しているので参照されたい。

この地球という惑星は、だれかが何かをやると一方では必ず批判や悪口が起ってくる度し難い世界だが、自己の想念を観察し、感覚器官をコントロールして宇宙的のフィードバックを起こそうとする試みは、どのように見ても「善事」でこそあれ、「悪事」ではない。したがって他人の批判を気にする必要はさらになく、第一、気になるような想念が起こればただちにそれを記録して、宇宙的想念に切り替えねばならない。このようにして次第に創造パワーの王座に近づく人は人生において如何なる障害や困難事に出くわすこともないだろう。「偉そうぶっているが内心では何を考えているかわかったものではない」という地球人の通念に惑わされないためにも想念観察こそは最良の方法である。

思いきって実行しようではないか。

進歩した 思索家の ために

(2)

ジョージ・アダムスキー



他人を裁くことなかれ

質問 カトリック教会はそのカギを原罪と結びつけなかったのですか。

答 ノウ。原罪の観念はそのカギから出たものではありません。原罪というのは「裁き」のことで、アダムとイヴはエデンの園に置かれたが、これが事実であるかどうかは別として、少なくともこれは象徴です。二人は善悪の知恵の木の実を食べると命じられましたが——善悪というの人間が勝手に作り出した知識です——食べました。何が起こったでしょう？ 彼らは我々と同様の普通人なのですがヌードであり、恥を知りませんでした。ヌードと着衣との区別を知らなかったからです。ところがある日、禁じられた知恵の木の実を食べたためにヌード姿は恥すべきことだということにきめたのです。彼らは自分自身を裁いたわけです。他人が彼らを裁いたわけではありません。そこで彼らはヤブの中に隠れました。神が二人を呼んでも、ヌードであるために外へ出ようとはしませんでした。神はだれが実を食べよと言ったのかと尋ねましたが、他に言った人はいないのです。だからイエスが教えの中で説いたのです。——これはチベットやヒンドゥー教の教えでも同じです——「自分が裁かれないようにするには他人を裁きなさんな」と。自分が裁かれさえしなければ、他人を裁くこともできないはずで、これは自然の法則なのですが、人間は毎日これを行っています。その結果、混乱に直面しています。他を裁くことによ

って人間は兄弟を自分以下だとみなしているのです。偉大な才能を持つ人がいるとして、古今未曾有の大作品を描き上げるとしますと、その才能は生得のもので、絵具の原料になる鉱物を掘り出す才能を持つ人がそれにならなくなったら、大画家の才能はむなしくなっています。ところが名声を博している有名な人、掘る人（労働者階級の人）を軽視し、自分よりも劣る人間だとみなしています。掘る人がその才能を發揮しなくなれば、大画家もその才能を發揮できません。しかるに他人に対する裁きによって分裂が生じ、そのために人間は兄弟にならず、むしろ互いに未知の存在になっているのです。

先程述べた自然の法則の問題に返りましょう。この法則の働きの見れば人間が今日悩みに直面している理由がわかるでしょう。大衆は別な惑星から来る人々のことを嘲笑していますが、この惑星人たちが現在の偉大なレベルに達したのは、自然の法則の理解によるのです。私たちはある面では彼らを羨望の念で見ます。別な面では彼らを非難しています。これは彼らの教えを受け入れようとしなからず、私たちは金星や火星などへ行きたいと思っていますが、そこへ行く宇宙船の作り方を知らず、しかし宇宙人たちは自然の法則を応用して今日の状態にまで発達し、宇宙旅行用の宇宙船を建造する方法を知っているのです。

習慣から逃れよ

人間は習慣の動物です。習慣を身につ

けるよりもそれを除く方が困難になっています。現代の人間はたしかに「歩くゾンビ(間抜け)」です。真の自我よりも習慣に支配されています。しかし意志の力によって習慣から逃れることはできるのです。イエスは言いました。「意志の力を十分に用いるならば、まばたきする間に変化するだろう」と。しかしそのような変化をとげるほどに意志の強い人はいません。私たちは自分の意識の中に意志を導き入れて、マインド(心)の意志を用いて変化を起こさせる必要があります。これがやれるほどに強くなれば、その状態に達するのに多年を要しません。本人はまばたきする間に達成するでしょう。ところが具合の悪いことに、私たちは各種の習慣に包まれていますので、もはや自分自身を支配できなくなっています。習慣に支配されているのです。習慣というものはそれ自体の生命を持ちません。それは寄生虫のようなものです。だからそれを除こうと思えば自分の手で戦わねばなりません。自分でその戦いを始める必要があります。たとえば掃宅してみると家中の者が互いののり合っています。何があったのかわかりませんが一応その状況に直面します。掃宅した本人がバカな人間ならばその騒ぎに加わるでしょう。そのために騒ぎはおさまりません。しかし本人が状況をよく見て、座り込み、腕を組んで黙ってれば、まもなく他の者は騒ぎをやめて、本人が騒ぎに加わらないのはどういうわけかと考え始めます。そのようにもやれるのです。神がやった事をやったのは個人としての

イエスです。だからいかなる個人でもそれがやれるはずで。それはすべて自身と信念の強さにかかっています。個人こそは結局、あらゆる物事に対して責任があるのです。

個人で物事を変化させよ

同時刻に大勢の人が一緒に生まれたにしても、人間はやはりただ一人で生まれます。立派な親類縁者があつたとしても、人間はやはりただ一人で人生をすごします。苦しいときには親類縁者が同情してくれるでしょうが、しかしあくまでも本人が苦しむのであつて、親類縁者が苦しむわけではありません。そして死ぬときもただ一人で死んでゆきます。人間はいろいろな物事を解決しなければなりません。それが、それもただ一人で行わねばなりません。物事を変化させ得るのは個人なのであつて、多数の群衆が変化させるのではないのです。だからイエスが言ったのです。「天国へ入れるのは少数者であつて、多数者ではないのだ」と。多数者が理解する時は決してないでしょう。理解するのは常に少数者だけです。イエスは言っています。「都市を攻略する人は偉大であるが、一つの『魂』を救う人はもっと偉大である」と。これは容易ではありません。個人や集団は都市を攻略できます。たとえば私があなたがたに銃を与えて、一名の人には警察へ、他の一人には市役所へ行けと命令し、私は放送局へ行つて強引にマイクをつかんで、この都市は占領されたと放送すれば

よいのです。百万の都市を取ることも容易でしょう。しかし一つの『魂』を救うことははるかに困難です。しかし最も困難なのは、最初に述べたように四つの感覚器官に『永遠の實在の状態』の真の基礎を認めさせることです。各感覚器官は結果(現象)であり、それらは結果(現象)によって人間を支配しています。何がそれらを(各感覚器官を)創造したかを知りません。だからギリシヤ人は言ったのです。「人間よ、自分自身を知れ。そうすればすべてがわかるだろう」と。しかし人間はまだ自分自身については知っていません。

大氣こそ神の生命の息

問 モーゼは神と話し合つたと言っていますが、一方では石板を投げつけるほどに立腹しています。これについて説明できますか。

答 モーゼは非常にすぐれたマジシャンでした。たしかに彼は神と話し合つたのですが、これはあなたも毎日やっていることで、ただ気づいていないのです。だれでも神と話し合っています。神なくしては生きられません。しかしそのことに気づいていないのです。これは別な大きな過失です。神が自身の似姿をした粘土の人形の鼻孔に生命の息(大氣)を吹き込んで以来、人間ばかりか虫、鳥、樹木でさえもこの空気がなくては生きられません。この空気が人間が創り出したものではありません。大宇宙は人間の家です。だから神——と呼ぼうが何と呼

ぼうが——の口からその空気がやって来ると。それは人間に無料で与えられていますし、どこへ行つても存在します。人間がひとたび呼吸を始めるや、その空気がよって生きています。人間の肉体は常に健康であるはずなのですが、もしスモモの実が喉につまんで気管がふさがれたら、空気が肉体内に入らないために間もなく死んでしまいます。空気がある限り人間は知的に生きられるのです。人間は十分な理解力を持たないために時折過失をおかしますが、それでも知的生物として生きて活動します。人間が話すあらゆる言葉は内部を通じて語る神の言葉です。東洋や西洋のあらゆる教えにおいて人間は神の意志なくして指一本さえも持ち上げることはできないと教えられています。「自分は終日、神と共に話しているのではない」と言わないで下さい。自分が神と共に話していることを知らないからといって、そのことは神と共に話していないという意味ではありません。神が人間に話しかけてこないとすれば、私たちは今ここに存在できないでしょう。

真理をゆがめた神官たち

太古においてエジプトの神官たちは神の力を自分たちの力にすり変えることによつて人心を攪乱していました。大昔に電気が発見されていましたが、それは奸計に応用されました。多数の人の力をかきくれば開かないような重いドアが全く自然に開いたりしました。当時の聖

職者は電気で開いたドアを開いたのだと言っていました。それでもなお民衆は神官に盲目的に従って、彼らを偉大な奇蹟の人と信じていました。これは蒸気についても同じです。当時にさかのぼってみますと、神官たちは雲を発生させることができ、トリックを演じては民衆に偉大な力を持つ人だと思込ませていました。私は最近メキシコへ行つて、太陽のピラミッドを見ました。もし現代の富裕な国がそれを建設するとすれば破産するでしょう。そのピラミッド建設の技術を持つ技術者が現代社会にいるかどうかは疑問です。偉大な真理がアステカによって如何にゆがめられたかを理解できますか？ このピラミッドの頂上に、彼らは神の知識を得たと称して祭壇を設け、そこで美しい処女たちが殺されたのです。神は絶対にこんな事を意図しませんが、この神官たちは民衆を手なづけるために民衆の恐怖心を持続させたのです。神官たちはすぐに処女たちを殺すほどの慈悲心も持たず、生きているうちに彼女らの肉体を切り裂いて心臓を取り出し、その肉体を下方の岩に投げ落としたのです。古代において人心を抑制するために人間が如何に真理をゆがめたかがわかれば、人間が虐殺を絶やさなかった理由も容易に理解できるでしょう。私たちは現代において処女を犠牲にはしません、他人が持っている最後の円を奪い取つても相手を飢餓におとし入れたります。

各細胞は心を持つ

人間の肉体は三十二兆の細胞から成り立っています。各細胞は本来独立している、他の細胞と完全な調和を保ちながら一つの単位として働いて人体を形成しています。各細胞はそれ自身の独立した心を持っています。かりに人間が階段から落ちて岩で頭を打ち、全く無意識になるとします。すると本人はもう意識的に肉体を支配しませんが、微小な細胞は本人の体の世話をします。たぶん本人の足の爪の端から一個の細胞が、負傷した部分までではるばると旅をしよう。これは世界の端から一人の人間が他の端まで旅をするようなものです。その細胞は何のために旅をするのか、負傷部分へ到着したときに何をしなければならぬかを知っています。そのうちその細胞は死にますので、かわつて他の細胞がそこで生まれまゝです。こんなことを一般人は全く知りません。人間はだれも肉体内で発生している事を知らないのです。人間が高次な自然の知性とどれほど接触するかは私にはわかりませんが、それでも人間は自分の肉体やその機能について何もわからないでしょう。それこそ人間が学び知らなければならぬことなのです！

人間がひとたびその館(肉体)について知つたならば、本人はその内部に入り込んで、いろいろな事実を発見します。イエスはこのことを部下に教えました。どこへ行こうとも自分の肉体に故障のない日はないのです。ちょっとした組織の故障が胃壁や肺に起こることがあります。本人は気づかず、そのときに痛みを感じません。なぜか？ 本人が正常に生

きている限り、その傷はひどく広がらないようになっていのです。するとこれを治す役目をする小さな外科医たち——細胞——が、本人の睡眠中も覚醒中も働きますが、本人はそんなことを全然知りません。本人が何を考えていようと一切関係はないのです。細胞は自分たちの仕事に従事するだけで、これが自然治療です。肉体内で行われる自然の化学作用こそ人間が作り出した如何なる化学よりも偉大です。あなたがたは今晩いろいろな物を食べましたね。——ケーキ、パン、ミルク、コーヒー、つけ物、バターとか——。それらが化学的に種々の物質の組み合わせであるにしても、みんなおいしく食べました。それらをすべて胃の中に落とし込んだあとも、何が発生したかを知りません。「何者か」にまかせてしまいます。その「何者か」が面倒をみなければ、数時間後に医者や呼ぶことになるでしょう。その「何者か」が面倒をみれば、あなたがたは明朝気分よくて、昨晚の食事はおいしかったと言うでしょう。しかし一日に少なくとも三度は起こるこのプロセスについて私たちは何も知らないのです。

創造の神秘を考えよ

生きた人体を人工的に作り上げて生きさせる方法を知っている人間は現代に存在しません。科学者も知っていません。しかしそれは行われていて、ここに私たちは存在しますし、私たちが死んだ後も別な人々が出現するでしょう。自然の働

きの真のプロセスを思い浮かべてごらん下さい。それはトウモロコシを取つて地面に落とすと似ています。ほうつておけば数日してから母なる大地より小さな緑の芽が出て来ます。芽は茎になり、茎は成長して穂軸を出します。そうするとまた穂軸を引き抜いて食べます。どのようにして成長したかがわかりますか？ あなたがたが知っているのは、種子を地面に置いて水をやり、成長してから食べたという、それだけの事です。それがどのようにして成長するかをだれも知りませんし、孔子、モハメッド、イエスその他の偉人にもわかりません。この人々が偉大であったにしても完全な法則までは理解できなかったのです。彼らが確実に知らなかったということになれば、現代の指導者も知らないはずで、彼らほどの理解力を持たないのですから——。

種子がまかれて一フォームとなり、その後子供になる場合、何が起こるかを知っている人はいません。母親でさえも知りません。数カ月後に体内で小さな胎児が動くとき母親は驚きます。胎児の創造に関して秘密を熟知しているならば驚かないでしょう。したがって、生命が創造される秘密について人間は何一つ知っていないという事実を正直に認めようではありませんか。ところが、生命の創造に際して「どうしたらよいか」を知っている「何者か」が存在するのです。できれば顕微鏡なしには見られないような微小な種子を想像して、次に網状組織が作られて非常に微妙なボタンになってゆく光景を描いてごらん下さい。これは次第にク

その巢のような一定のボタンになってゆきます。小さな線はやがて形成されるフォームの骨になる部分です。もつと細かい組織の線は各部へエネルギーを供給する神経になります。このボタンは青写真みたいに描かれるのですが、あらゆる線は互いに分離しています。それからついに、いわゆるエクトプラズム形成の過程が始まります。構造が明確になり始めて統一化が起こります。神経間の絶縁物であるエクトプラズムが入ってきます。神経組織はすさまじい力を持ちますので、それが互いに交交しますとひどい痛みが起こります。肉体内の痛みは二本の熱いワイヤーが互いに交交すると同じで、接点でエネルギーを燃焼させます。

これらすべての事が起こっているのですが、母親はこれについて何一つ知りません。胎児を作り上げている「人」は、死というプロセスによってそこを離れるまで、その中に住んでいる「人」です。なぜ彼は自分が生まれた後に、自分が自分の肉体を作ったということを知らないのでしょうか？ これは前にも話しましたように、四つの感覚器官のためです。眼はその肉体と共に生まれますが、それ以前に出生した経験はありません。今回が初めてで、他の口、鼻、耳も同様です。肉体の心も初めて出生したのです。

肉体を建設した「人」はただちに結果（現象）の世界に従うか、または無理やり結果（現象）を認めさせられますがこれはその両親が結果（現象）に従って生きているからです。両親はその子に対して結果（現象）だけを見よ、数百年続

いてきた伝統と因襲という毛布で自身を包め、と主張します。この哀れな「人」は十八歳、二十歳、または三十歳頃になったとき、やつと目覚めて、すべてが間違っていたことを悟ります。すべてはそこの「人」が自身の内部で感じているボタンに適合してはいないのです。しかしまだ克服しようとする「何か」があります。その人が作った家（肉体）は、その家の中で本人自身を表現させようとはせず、家はあくまでも自分自身を（家自体を）表現しています。ついに本人は家（肉体）と一体化し始めます。そして伝統・因襲・習慣等の重荷を負い始めます。これは大きなあがきです。本人が生命の真の意義などをごくわずかに悟り出すまでは、今生の生活を終えようとしており、肉体を放棄せざるを得ない時に達しています。

地球人は幼児をダメにする

金星ではこういう事をしません。彼ら金星人は生まれた幼児から学び取るのです。幼児というものは原初的段階を表現しているからです。あなたがたも正しく調和するならば多くの物事を学ぶことができます。というのは、新たに生まれ出るものはすべて、完全に新鮮な状態で生まれて出るからです。ところが地球人は幼児を無視し、彼らの心をたわごとで満たしてしまいます。石盤（訳注Ⅱ昔流行した小型の黒板みたいな物）にたわごとがいっぱいに書かれてあれば、こんなものから学び取ることはできないと常識は

訴えます。赤ん坊の心は何も書かれていない石盤のようなものですが、地球人はそれをナンセンスな物事で満たしてしまっています。地球人は自分が如何に多くの物事を知っているかを自慢しがりますが、実際に知らねばならない事柄に比べれば実は何も知っていないのです。

私は海軍から要請を受けて以来、円盤研究を続けてきました。それ以前は天文学と、科学と哲学のコンビネーションを探究していました。これらの分野に深入りすればするほど、自分が何も知っていないことに気づくのでした。しかるに、この世界では一夜にして円盤の専門家になった人たちがいます。学べば学ぶほど自分がほとんど何も知っていないことに気づくはずで、前途に多くの未知の事柄が横たわっているのです。真理を把握するのに自分の意識を高揚させることができないう人は、赤外線ビームを放射して宇宙人とコンタクトすることなどはできないでしょう。宇宙人はそんな事をやらなからです（訳注Ⅱかつて各国UFO研究グループ間で赤外線ビームを放射して各種の符号などで宇宙人にメッセージを送ろうとする方法が流行したことがあつた）。宇宙人は符号を応用しません。将来、電子工学の分野で通信システムが発達して、現在よりもはるかに超短波になれば、他の惑星から直接に話しかける声を聴けるようになるかもしれません。符号による通信は来ないでしょう。

復活の真の意義

問 私たちが肉眼で見る物は実在するものなのですか、それとも不可視な物の投影なのですか。

答 人間が肉眼で見る物は全く実在する物なのですが、実在物のエッセンスまたは純粋な源泉ではありません。それは実在物の結果にすぎません。肉眼で見えない物が永遠に実在する物です。眼に見えない物が実在するのですが、それは一時的な実在または結果です。人生というものが実在物というよりもむしろ夢のように思われることが何度もあるでしょう。それはあなたが「夢見ている」からであつて、「生きて」いないからです。あなたが真実に生きているならば、あらゆる疑惑は消えて、自分が真実に生きていることを「悟り」始めます。人間はまだ自分自身の何たるかを悟るほどに眼覚めていません。それが聖書で言う「復活」であつて、従来教えられてきた復活とは意味が違います。自分が何であるかを知るときこそ復活なのです。人間はまだ生きてはいません。だからこそスペース・プログラズは私たちとは異なるのです。彼らは自分の何たるかを知っているのです。彼らは宇宙を旅して彼らの「家」を楽しんでいますが、地球人は未来にそれを楽しむことを期待しているだけです。地球人はそれを「夢見て」いるにすぎません。

騒ぎに同調しないこと

問 地球人は幸福ではないのに、なぜ彼らは戦い争うのですか。

答 だれかがこの十年來横腹に痛みを持っていて、あなたがそれを取り除いてやるうとした場合、もし相手がその痛みを楽しんでいたとすれば、よけいな事をすると食ってかかるでしょう。そのことに気づきませんか。

問 その場合どうすればよいのですか。

答 先程お話ししたように、ケンカをしている人々の所へやって来た人のようにやればよいのです。これについては日本の一青年のすばらしい話があります。彼は金持の一人息子でイエスの教えを礼賛し、イエスのような生き方をしたいと思っていました。家族の反対を振り切ってあらゆる物を捨ててしまい、衣をまとって善行を積み出かけました。その高徳と堅固な信念のために有名になったのです。ある日、司令官が、暴動の発生している軍の營倉へ行ってくれと要請しました。そこで彼は囚人たちが騒いでいる室内へ入って行き、約五分間、腕組みをしながら無言で立っていたのです。するとやがて騒ぎがおさまって、静寂そのものになりました。そこで彼が一言だけ発言したのです。「静けさというものはすばらしいではありませんか」。そして歩いて出て行きました。

二人の人間が何のために争っているのかわからずにケンカをしている場所へあなたが割り込んで行きますと、逆に鼻へパンチを食らうでしょう。しかしケンカがすんだ後、相手二人が互いに誤解し合っているにすぎないことを指摘してやりますと、相手は同意するでしょう。現代の世の中はそんなものです。

問 これは「不安定」という一語であらわせませんか。

答 なぜ不安定になるんです？

問 人間がそんなふうに出てられたからですか。

答 よろしい。その線に沿って説明しましょう。だが答は簡単です。私たち人間の悩み心配わづらひというものは、全然起こりもしない物事を心配しながら生涯をすごすことにあります。もし何かの難事が起こったとすれば、それは本人の誤った考え方がそれを引き起こしたにすぎません。人間は多くの誤った物事を促進して、それに直面しています。創造主が人間を地上に創造したということは、すでに創造主が人間にとって必要な物を準備しているからだという事を、なぜ人間は信じないのでしょうか？ 最悪の父親すらも子供たちを餓えさせないでしょう。人間を地上へもたらした創造主の何たるかを理解もしないで、人間は創造主を礼拝します。しかし実際は理解しないために、人間は創造主を信じていません。信じていないために、人間は互いに喉を切り合っています。それは創造主よりも人間（肉体的人間）の方を信じているからでしょう。そして人間を信じている限り「安定」はありませんが、創造主を信じていれば「安定」があるのです。

問 それなら「安定」は人間の内部から起こるのですか。

答 そのとおりです。内部に神が存在するからです。

愛はあらゆる法則を成就させる

問 土星へ行くのに何時間かかるのですか。土星はこの太陽系の王座ですか。

答 金星へ行くよりも少し長く、約十八時間です。金星までは約十四時間です。土星は法廷惑星で、太陽系のバランスとなつています。地球は発達段階において火星の下位にあります。火星は全くの技術惑星で、またきわめて知的ですが、その行政システムは宇宙的で、そして地球がこれから応用し始めようとしている分配システムを持っています。地球の国連は世界の物資の平等利用と世界政府を提唱していますが、これは火星の段階に従うもので、一方、火星は更に高度な惑星に従っています。学校の進級制度と同じようなものです。

金星は愛の惑星で、万物を等しく尊敬する意味での愛です。だからイエスが金星から地球へ来て愛の法則を説いたので、愛（慈悲）はあらゆる法則を完成させるのです。モーゼは報復の法則を教えましたが、これは民衆がそれ以上の高度な法則を受け入れる状態になかったからです。実際彼は次のように言っています。「行って、互いの喉を切り裂け」。私たちは理解力が欠乏しています。ひとたび他人を理解するならば自分をも理解することになります。また、自分を理解するならば、他人をも理解するので、もはや他人を傷つけたくなくなるでしょう。

分類の誤りをおかしている

私たちは物事を分類するのに過失をおかしています。各国を強弱に分類しています。個人ばかりか国家間にも一種のカースト制度を作っているのです。そして全人類を統合した世界国家を設立しようとはしません。他の諸惑星の人々はこのことをやっているのです。たとえばドイツは物事の「芽」をあらわした国ですが、これはドイツ人がかつて可能と考えられた以上に物事を発明しているからです。別なある国は哲学や文学などを特色としており、それがやがて全人類の所産になります。ある特定の国だけが重要なのではなく、あらゆる国家がヒューマニティーのために貢献しているのです。

米国はかつてのアトランティス人を象徴しています。このままでゆけばアトランティスの破壊の二の舞いを演じることになるでしょう。ソ連も米国、英国その他と大差ありません。みなダイナマイトを持って遊んでいます。

一八八八年にフランスの科学者団がアフリカの領地へ行ったとき、厚さ四インチもあるガラスが数百マイルも敷かれた床を発見しました。なぜそんな所にガラスが存在したのか？ 米国がホワイトサンズで最初の原爆を爆発させたとき、同じようなガラス状物質ができました。太古の文明も原爆で自滅したのです。

(以下次号)



〈連載〉 米国GAP本部訪問記 (2)

第1部

きらめくビスタの星 (2)



久保田八郎

ヨハネ二十三世から授与された黄金のメダル

久「アダムスキーはローマカトリック教会からメダルを与えられたのでしょうか」
 ア「そうです。そのメダルを見たいのですか？ 取ってきましょう。そのメダルの写真もありますわ。その写真を持っていますか？……………そう、持っているのね。じゃ取ってきますわ」

アリスは奥へ入ってからすぐに小さなケースを持って来た。意外に地味なケースである。

ア「これがそのメダルです。中から取り出してごらん下さい」

言われるままにケースをあけてみると燦然と輝く黄金の小さなメダルがある。直径五・六センチはあるものかと思っていたが、案外に小さくて、径二センチ位である(前写真真参照)。手に取って両側を交互に見ながら、両面に彫り込んでありますね、とつぶやくと、

「そう、両面に彫ってあります」とアリスが、のぞき込みながら説明する。私が「John XXIII」という横文字を英語で発音すると、アリスが続けた。

「そうよ、ヨハネ二十三世よ。法王はたいそう博愛の精神を持った方でした。従者をつれずにただ一人で街頭へ出かけたり、刑務所へ行つて囚人たちに話しかけたりした人です。ほんとうに男の中の男でした。聖職者たちが一般大衆とは超越した立場にいるような教会の伝統に従うことをきらっていました。あらゆる人が法王の兄弟でしたし、法王もそんなふう

うに感じていましたし、またそんなふう

に大衆に接していったんです」
 私と瑞君が交互にメダルを手にして見続ける。

久「アダムスキーは法王が亡くなられる前にたしかに会ったのですか？」

ア「ええ、亡くなられる二日前です。アダムスキーは法王への伝言を帯びていたんです。つまりスペース・ブラザーズから寄せられたメッセージを法王に伝えるにいったわけですよ。すると法王は『有難う。私はこれを持っていったのです』とおっしゃったそうです。それを受け取るだろうという内奥のフィーリングを持っていたんですよ。法王はたいそう喜ばれたということですよ」

この偉大な法王ヨハネ二十三世も進化した惑星から地球へ転生した人なのだろうか！

久「アダムスキーは法王に『包み』を渡したと聞いていますが——」

ア「そう、書類の入った包みです。言い替えば、メッセージの入った包みですわ」

久「それはどんなメッセージですか？」

ア「私にはわかりません。でもアダムスキーがそれを渡すと、法王は『有難う。私はこれを持っていったのです』とおっしゃったのですから、法王には内容がわかっていたんだわ。ね、法王はあらゆる物事に同調できる人だったのよ。だから自分で行く必要がないということがよくわかっていったんだわ。周囲の人がモルヒネを与えて眠らせていたんですよ。法王は

手術を受けられないほどの年寄りではなかったんだけど、あまりにリベラルな人だったために教会が排除しようとしたんです。一般人は法王というものは神の次に偉い人だと思っているのに、法王は教会が確立した伝統に服従しなかったんですからね」

よし、このメダルを写真に撮ろう！
 アリスに撮影の許可を乞うと、よいと言う。急いでカメラバッグから複写用のマイクロニッコールレンズを取り出してカメラに装着し、三脚にすえた後、丸テールにメダルをのせて電気スタンドを照明灯にしながらファインダーをのぞき込んだ。複写には自信がある私だが、いささか緊張する(ちなみに「UFOと宇宙」誌に掲載する写真類はすべて私が会社で複写して写真原稿を作成している。ただしその場合はアサヒペンタックス6×7にマクロタマールレンズを使用するが、メダル撮影には私が携行したニコンフォトミックを用いた)。

数枚シャッターを切ったが、照明が暗いので少々不安な面持ちでいると、アリスが、このメダルの写真は海外の図書にたびたび掲載されたが、スエーデンのエディス・ニコルセンの書物に印刷されたものが最良だったと言う。そして海外の図書は良質の紙を使用するので写真の印刷が良い、というようなことを話す。

撮影が終了して一息ついていると、またアリスが奥へ引つ込んで、今度は別な品物を手にして出て来た。これをごらんと言うので、見ると見事にカットされた大きなクリスタル・ペンダントである。

謎のクリスタル・ペンダント

ア「これはアダムスキーが講演をするときに首のまわりにかけていたクリスタルです。旅行中はほとんどいつもポケットに入れていました。ごらん下さい、ダイヤモンド・カットですわ。ダイヤモンドのように多くの面がカットしてあるでしょう」

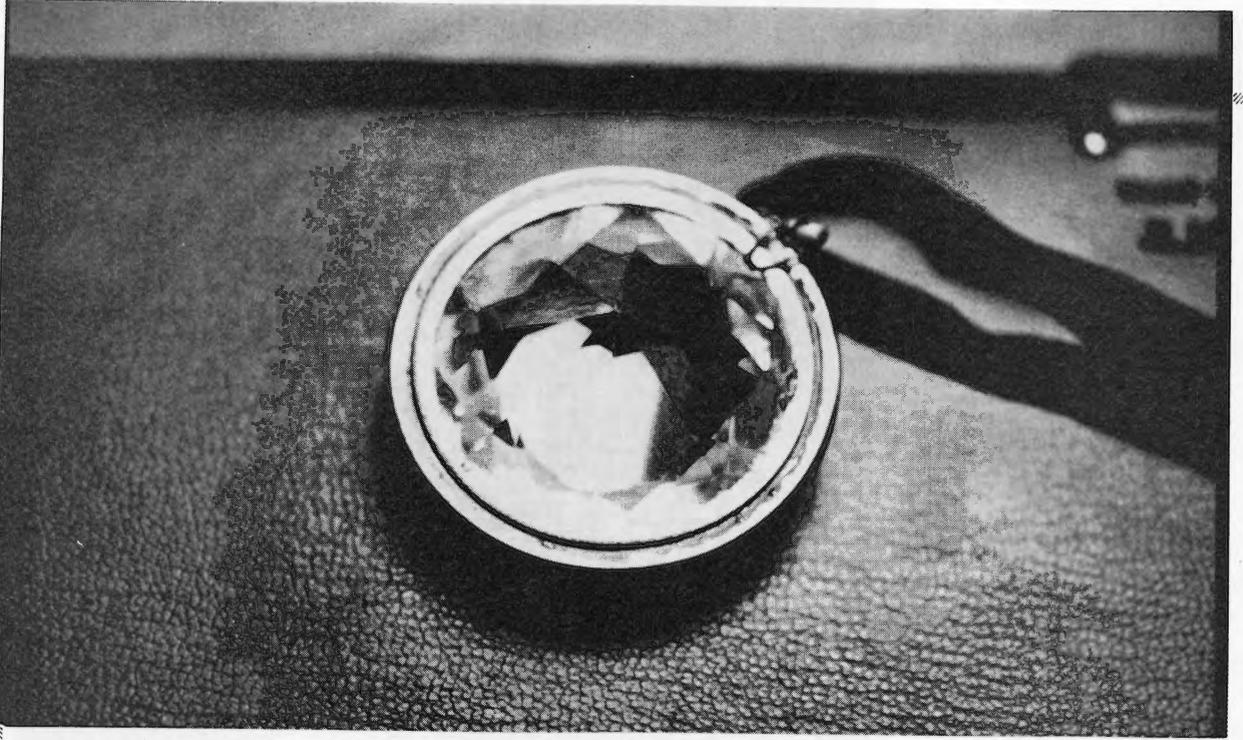
何というすばらしいペンダントだろうか！ 直径七センチばかりの水晶のように透明な丸い宝石の両面に沢山の小面が見事にカットしてあり、手に取るとずしりと重い。直感的に、これは別な惑星の人から与えられた物だな、と思って尋ねてみた。

「スペース・ブラザーズがこれをアダムスキーに与えたのですか？」

ア「彼がどこで手に入れたかは、むしろ謎です。マーサと私がグループに加わったときはすでに持っていました。そして講演するときには首からかけていました。」

『それは一種のコンタクト・ポイントなのだ』とアダムスキーは言っていましたわ。私は一種の『焦点』だったと思うんですよ。いわば受信機みたいなものかしら——。彼はポーランド生まれのために少し訛りがあったんですが、ときどき完ぺきな英語を話すことがあったんです。だれかが彼に(テレビシーで)話しかけていたのかどうか、私たちには全然わかりません。そのクリスタルから何かのフィーリングが起きますか？」

アリスの説明によると、アダムスキー



● 謎のクリスタル・ペンダント（上が表，下は裏）





●教会で講演する若き日のアダムスキー。胸にクリスタル・ペンダントをさげている。

はこのペンダントを集光レンズのようにして、外界から来る想念波動をキャッチしたということらしい。
久「ウーン……何かを感じるような感じがしますね」
ア「“温かさ”を感じませんか？」
そういえば、胸につけるとボーッと温かくなるような気がする。堀君に渡すと、彼も胸にあてると熱いと言う。

久「これは金星の物ですか？」
ア「そうかも知れません。しかし先にも言ったように、やはり謎の品物です。どこで手に入れたかをアダムスキーは絶対に洩らさなかつたわ」
久「だれにも話さなかつたのですか？」
ア「そうよ。だれかがそのクリスタルのことを尋ねると、アダムスキーは次のように答えたものです。『ああ、これはあ

る日商店街をぶらついでいて、ふと見つけたので買ったんですよ。私はそんなことはないと思うわ。ただ人を満足させるためにそう答えただけなのよ」
クリスタル・ペンダントも撮影した。ただしここに掲げたメダルとペンダントの写真は、スライドにするためにカラーリバーサルフィルムで撮った写真を帰国後再びモノクロフィルムに複写したもの

で鮮明度が少々欠けるのが残念である。ペンダントの外周には金色の金属のフチがつけてあり、長いヒモが取りつけてある。片面の中心に突起部があって、その方が正面になるようにつり下げたという。

そのあと、アダムスキーの遺品でブラザーズからもらった物はないかと尋ねたが、アリスは否定した。本当なのかそれとも隠しているのか、どうもよくわからない。かりに何かをもらったとしても地球人はそれが別な惑星から来た品物だとは信じないだろうと言う。そうかも知れない。ピーター・フルコスでもない限り、地球人は何を見ても正体を見抜く力を持たないのだ。

夜も更けてきた。しかし話は尽きず、私は次々と質問し、意見を述べたが、時間の制約は如何ともなし難く、気がせくうちに、フレッドが迎えに来たので、私たちは丁重に謝辞を述べて屋外へ出た。

満天の無数の星のきらめきは圧倒的であり、その美しさに息をのんだ。星などほとんど見えぬ東京の夜空に比べてこれは何という相違だろう。日本でも私の郷里ではよく星が見えたが、久方ぶりの大宇宙の景観を異国で観賞しようとは予想しなかった。

フレッド・ステックリング宅を訪問

熟睡した翌朝、爽快な朝の空気の中を身仕度をすませて、また隣のレストラン「ウォーターゲート」へ入る。すでに我々を知っている黒人のウェイトレスが例



●レストラン「ウォーターゲート」にて。

によって丁寧な態度で迎えてくれる。朝食兼昼食の軽い食事をもって、ゆつくりとくつろいでから、しばらく二人で話し合った。コーヒー代は七十五セントだが一回だけ払えばあとは何杯でも無料で注いでくれる。ただし日本のコーヒーのように濃くなくて、かなり薄口だ。

店内では三々五々白人客が食事や談笑をしているが、私たちの方を物珍しく見たりはしない。東洋人を見馴れているのか、それともそういうマナーを心得ているのか——。レジで代金を払うときに私が肩から下げていたカメラが一隅のテーブルを囲んでいた四、五人の若い男たちの鼻先へ来る格好になった。すると彼らは急に談笑をやめてカメラの方をのぞき込みながら小声でヒソヒソと囁きあっている。「すげエじゃねえか」とか何とか言っているらしい。私はおかしかったが愉快でもあった。ニコソフォトミックボデ

ィーにズームニッコール80mm—200mmレンズを着けていたのだが、こんな物は日本

でならザラに使用されている。ところが、後日わかったことだがアメリカではニコソカメラが最高級品とみなされて(価格も日本より高い)、これを携帯している日本人を大金持ちだと思わらしい。しかしカメラ製造技術では日本が世界のトップをいっているので、四大カメラ

(ニコン、キヤノン、ペンタックス、ミノルタ)のどれかをぶら下げていれば大威張りで歩けることも事実である。ただし良くない人に狙われやすいから注意を要する。

レストランを出てロイヤル・インへ引き返し、ロビーへ入ると、カウンターの係は変わっていて、若い娘さんがいる。「Morning!」と大声で挨拶すると、何も言わずに妙な顔をして我々を見ている。私の郷里の方言でいう「キヤイの悪い」物を見たような顔付きだ。そしてまもなく奥へ引込んでしまった。

十時にフレッドがやって来た。相変わらず生真面目な態度だが、微笑を浮かべず挨拶してから車へ案内する。

Are you alone?(一人ですか?)と尋ねると Steve will come to my home later. (ステイヴがあとで私の家へ来ます)と言う。今日はフレッド・ステックリングの家を訪問なのだ。イングリッドという奥さんやグランという息子さんのことはフレッドの著書「なぜ空飛ぶ円盤は来るのか(文久書林刊)」に出てくるので名前は知っているが、会うのは今日が最初なので、期待で浮き浮きしている。車を飛ばしながら雑談を続けていると、かなり閑散とした地域へ入って行っ



●製作中の飛行機を見る久保田(左)とフレッド。

た。民家があちこちに散在する程度で、樹木の多い静かな町外れという感じだ。すると小さな家のガレージの前で停まった降りよと言う。フレッドの家に着いたのだ。ガレージは車二台が入る位で、見ると製作中らしい飛行機が置いてある。胴体だけで翼はついていない。それを指さしながらフレッドが、目下製作中なのだと言う。まるで模型飛行機を作るように気易く話すので少々驚いた。

奥へ入ると居間の入口の所で若い婦人が待っていた。イングリッドだと思いがら挨拶する。彼女も微笑しながら挨拶を返したがその言葉は途中で消えたり内気で非常におとなしい女性らしい。

居間の広さは十二、三畳位だろうか。奥の方に美しい花が大きく生けてありその傍に長いソファがあるので、そこへ

腰をおろす。そして反対側の入口の方に向かって左側は裏庭に面したガラス戸である。右側は壁をへだてて台所になっているようだ。私の位置からかなりの距離をおいてソファがあり、そこにイングリッドが座ってこちらを見る。米国の家庭の居間は日本の応接四点セットのように低いテーブルを間にして互いに鼻をつき合わせる形で対座するのではなく、居間のあちこちにソファが置いてあって、ある程度の距離を保つのである。

背の高い金髪の美少年が出て来た。私の方へ歩み寄って How do you do. と挨拶する。私も同じ言葉で返して握手する。これがグランだとイングリッドが説明したので驚いた。身長はほとんど私と同じ位だ。これがフレッドの著書に出てくる少年か、と尋ねると、ずいぶん大きくなりましたと、とイングリッドが笑いながら話す。白い上衣を着ているが、胸には金色の金属の飾りが施されていて、まるでスタイルブックから抜け出てきたような美しい容姿だ。遠い東洋から客人が来るというので特にめかし込んだのだろう。小さな可愛い女の子も出てきた。名前を聞くとエリシアだとイングリッドが説明する。メキシコで生まれて、今五歳だという。笑顔が愛くるしい。

イングリッドは実に緩慢に話す女性で聞いているとどこかしくなるほどだが、相当な美貌で、しかも絶えず輝くばかりの微笑を浮かべており、まともにその顔を見ていると眼がクラクラしそうだ。豊かな金髪が実に美しい。年の頃は三十歳代であろうが、ずいぶん若く見えるし、

超ミニスカートなので眼のやりばに困る。極力視線が相手の顔から下へ行かないようにコントロールしながら雑談を続ける。

奥へ引っ込んでいたフレッドが出て来てソファに腰をおろしたので、ホッとして彼と会話を始めた。

久「アダムスキーに関して詳細に話して下さいませんか」

フ「私は東部でアダムスキーと長くつき合いました。一九六二年と六三年に彼の書物を読んで手紙を出したんです。『あなたにお会いしたい』とね。すると彼が『東部へ講演へ行くので、そこで会いましょう』と返事をくれたんです。それで東部の私や友人たちの家に招待して長時間、美しい話を聞きました。また一



●熱心に語るフレッド

緒に多数の円盤も見ました」

コンタクトの体験を聞く

久「あなたの著書『なぜ空飛ぶ円盤は来るのか』は立派な書物ですね。あの中でスペース・ブラザーズとコンタクトしたと書いてありますが、どういう状態だったのですか？」

フ「そうですね、一九六五年に私はワシントンに住んでいましたが、その頃アダムスキーがそこへ来たんです。死ぬ前です。そのとき私はワシントンの近くでスペース・ブラザーズに会ったんです」

久「相手は一人だけですか？」

フ「いや、異なる日時に三人の方に会いました」

久「みんな男ですか、それとも——」

フ「三人の男だったと言ってよいでしょう。数名の女性の宇宙人にも会いましたが、話しませんでした。つまり三名以上の宇宙人に会ったわけですが、今あなたと話しているように直接話し合ったのは三名だけです。スペース・ブラザーズのなかには地球上で仕事をする人もありますが、全部が全部地球人とコンタクトするわけではないんです。彼らは別な惑星から来るにしても『私は別な惑星から来たんですよ』とは言いません。だから意識でもって感じるよりほか仕方がないのです。意識でもって相手が宇宙人だと感じたならば、相手の惑星のことや宇宙空間などについて質問するとよいでしょう。そうすると答えてくれます。しかし、いきなり『私は金星から来た、あの

人は火星から来た』などと発言はしません。大衆が信じないからですよ。科学者は言っています。『金星や火星には生命は存在しない。熱すぎたり冷たすぎたり、大きすぎたり小さすぎたりする』とね」

久「あなたがスペース・ブラザーズに会ったのは何歳のときですか？」

フ「今私は三十七歳です。ブラザーズとコンタクトしたのは一九六五年、六六年と六七年です。ご存知のように私は十二歳のときドイツのベルリンに住んでいました。そこには大きな塔があります。パリーのエッフェル塔みたいなのが——。頂上の展望台に小型の望遠鏡があるので私はよくそこへ昇っては望遠鏡で惑星などを見たものです。『何をしているんだ？』と人々が聞くもんですから『火星や金星を見ているんだよ』と答えると、『なぜだ？』と尋ねるので、『地球と同じように人間が住んでいると思うからさ』と言うと『ああ、おまえは氣違いだな』と言って笑うんです。

私は自室の壁に世界地図を貼りつけて新聞などでUFOの出現記事を見るたびに目撃場所へピンをとめたんです。するとずいぶん沢山のシルシができました」

いつのまにかステイヴがやって来てイングリッドのそばに座り、一同の話に耳を傾けている。この人について実際感心するのは、やたらと発言して他人の会話を邪魔をしない控え目な態度である。フレッドが話を続ける。

「こちらへ(米国へ)来てアダムスキー氏に会ったとき、ずいぶん多くのUFO

書を読みましたが、その多くはサイキック(心靈的)でした。多くの人が言います。『自分は横になったままで宇宙人と霊的にコンタクトしている』と。そしてそんな体験を書いたりしますが、これは正しくありません。私はそんな体験を信じません。私たちのように直接英語を使用して宇宙人に語りかけた人に会おうと思っていたんです。アダムスキーがそれをやっています。ワシントン市でアダムスキーに会う前に、私はここに描いてある円盤と同じ型の円盤を空中に目撃しました』と言ってフレッドは壁にかけてある見事な円盤の絵を指さす。「高度は四百五十メートル位でしょうか。そう高くはありません。三個の球型着陸ギヤや丸窓その他が見えました。妻、息子、その他大勢の市民も見えています。新聞にも記事が掲載されました。それで思ったんです。『これはアダムスキーが撮影した円盤と同じ物だな』と」

次にフレッドはある小さな品物を指さしながら説明した。「これは一九六六年にウィーンへ講演に行ったとき、もらったものです。大ホールに沢山の人が来てくれましたが、講演が終わったあとで、オーストリア空軍の一紳士が私の所へ来て言うんです。『あなたの講演を聞きまして。これをギフトとして差し上げましょう。私たちオーストリア空軍は電磁推進方式が間違いないことを知っています。この推進方式で宇宙船が作れるんです。私たちはフトボール位の非常に小さな装置を持っており、これを応用すれば燃料なしに空中を飛べるんですよ』

大國政府の内幕

これは一九六六年の、しかもオーストリアのような小国でのことです。米國やソ連のような金のある大國がずっと以前からこんな装置を開発していたことは想像できるでしょう。兩國とも電磁推進方式の宇宙船を持っていると思いますよ。しかしそれを公開しないのは、世界の經濟がガソリン、オイル産業、タイヤ、自動車生産修理、道路建設などに頼っているからです。もし金星で用いられているような乗物を地球で使用すれば、地上の空間へ浮き上がるので道路を必要としません。機械はベアリングや潤滑油なしに組み立てられ、あらゆる物が電磁力で作動します。だから摩擦もない。そうすれば一機の乗物が三千年ないし一万年はもつでしょう。現在の交通機関に要しているあらゆる設備や燃料は必要なくなり、大量の失業者が出て食ってゆけなくなり、大量の失業者が出て食ってゆけなくなります。だからこそ米ソ兩國は公開しないんです。兩政府ともそんな状態になることは知っているのです、すべてを秘密にしてカギをかけています。いつかは公開するだろうが今はだめだと言っています。

だから我々はこの知識(UFOの推進力に関する知識)をもってたたかっているわけです。世界の經濟に対抗してたたかっているんです。しかし産業界の人々は大統領や王などよりも強力です。大金持ちや産業界の大立物は大統領を任意で上げて事務室へ押し込めますが、仕事をやらせてみて気に入らねば、追い出して別な人と交替させます。『でも大統領を選ぶのは一般大衆じゃないか』と言う人もありますが、これは真実ではありません。政府内のあらゆる事は決まっています。すべてが不正に行われているんです。政府は貨幣經濟の維持を望んでいて、改革をきらっています。宗教界も改革を望みません。というのは、ローマカトリックその他多くの宗教団体が同じような經濟上の悩みをかかえているからです。たとえば法王が聖ペトロ広場へ出かけて、祝福を受けようとする大群集の前で次のように言ったとすればどうでしょう。

『この祝福には何の意味もないよ。諸君が平和を望むのなら自分でそれを作り出す必要がある。幸福を望むのなら心の中心を幸福にすることだ。成功を望むのなら自分で出かけて行ってそれをつかめ。この世界をエデンの園に変えようとしてもイエスが再来してやってくれるわけではないよ。諸君がこの世界を混乱させたんだから、諸君が自分で変えねばならんだ。こんなことを言えば教会は文句なしにつぶれるでしょう。』

これはわが家みたいなものです。昨日は屋内が散らかっていましたが、今日はあなたが来るということで掃除をする必要がありました。同様に地球人は家であるこの地球を掃除する必要があります。宇宙人が我々にかわって地球を掃除してくれると考えるわけにはゆきません。

万人には神ともいえる意識が内在しています。これはどこか遠い所にいるのはありません。ここにいるんです(と言っ

ばあらゆる宗教はつぶれるでしょう。金が入らなくなるからです。だからそんなことはやらないでしょう。米ソは金星へ宇宙船を送りましたが発見した温度がそれぞれ違います。一方は九百度だと言ひ、他方は六百度だと言ひ。観測機械に誤りがあったのかも知れない。ソ連はつい先週二個の金星ロケットを着陸させました。なぜか？十年前に九百度で地獄だとすれば人間は住めないはずなのに、なぜまた多額の費用をかけて二個のロケットを打ち上げたのか？要するに彼らは金星の真相を知っているからです。

しかもソ連の宇宙船が着陸する前にアメリカとソ連は五年間の協定を結んで、ソ連へ小麦を売る約束をしています。今年ソ連はひどい不作だったんです。ところでソ連が宇宙船による情報をもたらし、金星の温度は地球と全く同じで、快適に住める場所だと判明しても、米当局はソ連に対してこの情報を洩らすなど言うでしょう。もし洩らせば小麦を売ってやらないぞとおどしをかけるんです。大國間の政治的な駆け引きはこんなものですよ。

地球の静止する日

ずっと以前、一九五〇年に二十世紀フォックス社が「地球の静止する日」という映画を製作しました。マイル・レニーが出演しています。一機のUFOがワシントン市へ着陸して、中から一人の宇宙人が出て来て平和のメッセージを渡そうとするんですが、陸軍が発砲して撃ち

倒すというストーリーです。私はその映画のフィルムを持っているんですよ。

アダムスキーは、これはアラスカのジュノーで実際に起こった出来事だと言っていました。この映画は事実に基づいて作られたんです。明日アリスの家でその映画をお見せしましょう」

続いてフレッドは映画の筋を説明し続ける。若い頃映画キチガイだった私は、日本でも公開されたような気がしたが、記憶に浮かんでこない。

それにしても映画というのは先に筋を知ってしまうと面白味が半減するので言わなくてもいいのと思ったがフレッドは遠慮なくしゃべり続けた。

一人の宇宙人が円盤から出て来て、地球での原爆実験をやめよというメッセージを渡そうとするのだが、周囲を取り囲んだ軍隊の兵士が発砲して肩を撃ったので、宇宙人は倒れて病院へ運び込まれる。しかし翌日、奇跡的に回復して脱出し、服装を代えて市中を歩き廻る。ワシントン市はパニックにおちいる。彼は各國の首脳と会談したが、うまくゆかない。米大統領はソ連へ行きしたが、ソ連側も米國へ来ない。こうして多くの國際的紛争が起こる。そこで彼は一科学者の所へ行つて言う。『あなたなら全世界の科学者を集められるでしょう。そこで科学者が答える。『よろしい。やってみよう。だがみんなは私の言うことを信じないだろう。別な惑星から人間が来たと言つても相手にされないだろう。何か証拠になることがやれますか？』すると宇宙人は、よし、やってみよう、と

倒すというストーリーです。私はその映画のフィルムを持っているんですよ。

答える。そして彼はホワイトハウスの外に着陸している円盤の方へ夜間帰って行き、懐中電灯を照らしてロボットに合図する。このロボットは動く機械である。ロボットは円盤のハッチを開いて中へ入り、機械を起動させると大きなテレビスクリーンに像が映る。そこで宇宙人は自分の惑星から来た人々とコンタクトし、次のように言う。「明日正午に全世界にわたって一大デモンストレーションを七分間行い、そのとき電気、車、飛行機、機械類のすべてを停止させよう」。そしてそれを実行する。だから「地球が静止する日」というのである。

テレパシーについて語る

夫人のイングリッドが話しかけた。「あなたはテレパシーを教えているのですか?」

おそろしくゆっくりものを言う人なので、こちらが戸惑うくらいだ。

久「教えているわけではありません。東京の月例研究会でESPカードを応用して一緒に練習しているんです」

フ「カードに記された異なる記号を用いてやるんですか?」

久「そうです」

フ「私たちはイメージを送信する練習をやっていますよ」

久「私たちの場合は私がいつも送信者になるんです」

フ「私が仕事で働いていて忙しいとき、電話をかけようにも余裕がない場合は、まず心の中に妻のイメージを描き、次に



●テレパシーについて話すイングリッド。

電話機のイメージを描いて、それから想念を送ります。すると彼女は受話機を取り上げて実際に私へ電話をかけてくるのです」

久「すばらしいですなァ」

フ「以前にネコを飼っていたことがありますが。それに想念を送ったもんですよ。私が帰宅するときに肉などを持って帰るとネコは入口の所まで来て待っているんです。帰宅する十五分位前に入口の所にも座って待っているそうです。動物はとも知的で、小さい動物が特にそうです。マインド(心)を持たないからです。印象やフィリングに対して非常に開放的ですな」

どうやらイングリッドはテレパシーのかなりな能力を持つらしい。顔付きからしても深い洞察力を秘めている女性のよ

うに見える。そこで聞いてみた。

久「あなたは相当なテレパシー能力をお持ちのようですが、どれぐらいの能力なのですか?」

イ「それはわかりません。だれもみなその能力を持っていると言ってるんじゃないかしら。ただ忘れていられるだけのことですわ。両親がその能力に気づかせてくれたから、だれしも思い出せないのよ」

イングリッドは楽しそうな微笑を浮かべながら、一語一語をかみしめるように話す。その超アンダンテは私によく理解させようという意図によるものではなく、生来のクセらしい。

ふたたびフレッドが命令口調のドイツ語訛英語で熱っぽく語り出した。

「一つ例をあげましょう。この小さな娘のエリシアですが、数カ月前に彼女に尋



●エリシア。

ねたことがあるんです。「おまえは前生のことを憶えているか?」と。憶えている、と言うんです。それで、おまえは何だったの? と聞くと、『前生では男の子だったわ』と答えるんですね。それでこの星から来たか憶えているか? と尋ねると、憶えていると答えて、その星の名を言いました。もちろん私たち夫婦は子供の答を理解していません。

ところであちらに住んでいる隣家の例をあげてみましょう。そこには幾人かの子供がいますが、あるとき一人の子供が父親に向かって『お父ちゃん、ぼくは別な星に住んでいたことを憶えているよ』と言ったんです。父親は、よしよし、おまえは何かを空想しているんだろう、と答えたそうですが、今度は女の子が前生のことを憶えていると言うんですね。そこで親父さんは心配になって、精神科医を呼ぼうとしているんです。『おれの子供たちは気が狂っている。調べてみてくれないか』と言っていました。そこで子供



●左よりスティーフ、フレッド、イングリッド。

たちもおびえるようになりまし。子供たちは『奇妙なフィリングが起ころんだが両親が理解してくれないんだ。両親に言わない方がよかったんだね』と言っています。こうして両親に認められないために記憶は失われてゆきます。これはピアノを弾く能力を持って生ま

れた場合も同じです。もしピアノが家にあれば容易に弾けるようになりませんが、両親が貧しくてピアノが買えず、来年だ、来年だ、もっと金ができたら、そのうち買つてやるよ、などと言っているうちに年月が過ぎて、能力は失われてしまいます。適当な時期に能力が引き出されないとダメなんですよ。

金星では子供が生まれると両親がその子とテレパシーでコミュニケーションしますが、これは肉体は新しくても意識は太古から続いてきているからです。意識は多くの異なる肉体に住み続けています。しかし新生児の肉体はまだマインドを持っていませんから見た話したりはできませんが、フィリングは持っています。これと同じフィリングがこの花を作り上げ、雲や雨などを作るわけです。両親は子供とテレパシーで会話を交わし、どこから生まれて来たか、前生は何だったのか、この生涯でいかなる運命を持っているか、などを発見します。そこで子供が生長して五、六歳になると、地球人の五十歳の人よりも「利口」になります。なぜかといえば、地球人は五十歳になってもまだ盲目の状態、自分がだれなのか、なぜこの世に生まれたのか、人生の目的は何なのかを知らないからです。金星では五、六歳で知っているんです。彼らがいかに進歩しているかがわかるでしょう。彼らが神秘の書物を読むから進歩するのではなく、自分自身や生命を研究するからです。特別なものは何もありません。いわば自然を観察するだけのことで。

以上はアダムスキーもこの地上に生まれたときを持ってきたものです。彼は三十歳、四十歳の頃にバサデナやロサンゼルス近辺の各地でグループに教えていました。宇宙哲学やメンタル・テレパシーなどを教えたんです。そして人間がこの知識を生かしている世界が別に存在するんだと語りました。そしてスペース・ブラザーズが地球へ来たときに宗教界、政界、産業界の指導者とコンタクトするために来たんですが、だれも耳を傾けようとはしませんでした。耳を傾ければそれぞれ自分の地位を失うからです。そこでスペース・ブラザーズは言いました。『私たちは私たちの生き方を知っている人、テレパシーを理解している人、簡単だけれども宇宙的な生き方を理解している人にコンタクトする必要がある。それはだれか、どこにいるのか?』と。ところが、ご存知のようにこんな知識を持つ人はごく少数です。だから彼らはアダムスキーにコンタクトしたんです。

ときには科学者とコンタクトして『よろしい、君が悩んでいる問題を解決するように援助しよう』と言います。パシル・パン・デン・バーグみたいに——。彼が例の金星人の足跡と象形文字を解読して小さなモーターを発明したのですが、援助を必要としたんです。あるときつまり、完成させる方法が見つからなかつたんです。そこでブラザーズは彼の所へ行って援助したんですが、こうして科学者というものは公の場所へ出かけて「宇宙人からこの知識を与えられた」とは言わないものです。ただそれを公開するだけのことで情報源を洩らしません。ただコンピュータの分野、コミュニケーションの分野にとどまるだけです。数千年間この地球ではクワとシヤベルで畑をたがやしており、牛に車を引かせていました。この五、六十年間に我々は航空機、宇宙開発、エレクトロニクスなどを発達させただけで、つまり実際には五十年間で石器時代から一挙にエレクトロニクスの時代に進歩したんです。これは地球人の発達のためでしょうか? 違います。地球人はそれほど利口ではありません。大気圏外から来た人々の援助がなければとてもここまで到達できなかったでしょう。こんなに進歩はしなかつたでしょう。我々が今日持っている科学技術の知識は宇宙人の援助のおかげであつて、これは厳然たる事実ですよ」

パシル・パン・デン・バーグの件は昨日もアリスから聞いたが、もう一度尋ねてみることにした。

「あの科学者のパン・デン・バーグは今どこにいるのですか?」

「誘拐されました。彼はモーターを設計して一九六二年にアダムスキーへ手紙を書いたんです。いや、一九六一年でしたか——。で、そのとき、彼は『アダムスキーさん、私はあなたの『金星人の足跡』からモーターを作りましたので、あなたの体験が真実であることを知っています。なぜなら、足跡が無意味なものならばモーターはできませんから。あなたに会いたいと思いますが、記者団にも会見して、私がこの発明をやったことを伝えようと思います』と述べたのです。」

そこでアダムスキーが返事を出して、だれにも洩らすな、まず私の所へ来い、その上で公開する方法を考えよう、と言ってやったのですが、バーグはこれを聞き入れず、記者団に真相を公開したあげくアメリカへ来るために飛行機に乗り、それが燃料補給でスイスへ着陸してから姿を見せませんでした。誘拐されたんですよ。結局スイスで消えてしまいました」

やはり忍耐力がものをいうのだから。人間の失敗のすべては直感力と忍耐力と不拔の信念の欠如が主因となるといふことは間違いないだろう。

フレッドが話した内容の概要を壙君に説明しているあいだ、ステックリング夫妻は何事かを話し合っている。ステイヴは全く無言のまま。窓外にはまだ明るい陽射しが広い空地に輝いて、空は青く澄み渡っている。

ふと見ると、息子のグランは書物を読んでいたが、それはどうやら父親の書いた「なぜ空飛ぶ円盤は来るのか」の原書のようなのだ。何というすばらしい父子だろう。アダムスキーを援助した父親を更に息子が援助しているのだ。私は中学三年生の自分の息子のことを想起せざるを得なかった。この子は小学校五年生頃まではアダムスキーの体験を信じ、教会に通って神の言葉を聞いては毎夜就寝前に幼稚園時代に教わった聖母マリアへの祈りを続行していたが、あるとき少年雑誌に掲載された「アダムスキーの円盤写真」は電気掃除機を撮影したインチキ写真でアダムスキーは山師なのだ」という某UFO研究家の書いた記事にショックを受

けて、それ以来UFO問題に対する関心を失ってしまった。哲学の感性もなくしてしまったのである。

グランの美しい横顔を見ながら、いささかの感傷にふけっていると、イングリッドが声をかけた。

過去世を透視するイングリッド

「彼は（と壙君の方を指さしながら）この人（ステイヴ）のことを心で知っていますか？」

このとき私は mentally (心) という言葉を memory と聞き違えたが、ここに名詞が来るのはおかしいと気づいて、その意味を悟った。そこでそのことを同君に伝えると何かを感じると言う。私は一気にしゃべった。

久「He says he feels something here.

He is very sensitive.」
「Yes, we know, we know」と答える。前生においてステイヴ・ホワイティングと同君が何かの関係にあったことを思い出させようとしているらしい。そして前生の透視はイングリッドがやっているようだ。

「彼は（壙君は）どこの世界から来たかを知っていますか？ つまり前生でどこに住んでいたか、ということですか」
フレッドが重ねて質問の意味を説明する。

「きつとあの人にはわかってるわ。表面では気づかないけれど（潜在意識では）わかってるわ」
「どこから来たかを尋ねているんじゃないか。」

ありません。必配はご無用です。どこから来たかを知りたいのではないんです。これは明らかに壙君にわからない場合を考えての心遣いである。

「いいえ、私は知りたいのよ」と言っているイングリッドは笑う。もちろん軽蔑の笑いではない。

そこで壙君に通訳して、何とか答えなさいという、わからないと言う。

久「わからないと言いました」
「いいえ、わかっているんです。表面では気づかなくても、わかっているの」と言って、あでやかに笑う。

「次のように言っている大勢の人に会ったことがあります。『金星、火星、土星に関して新聞で書いていることはウソだ。なぜって、私は前生で金星に住んでいたんだから』。また次のように言う人もあります。『ああ、金星は美しい惑星だ。大きな海、美しい山々、すべてが緑だ。だって私はそこに住んだことがあるんだもの』。この人たちは新聞の記事を信じていないんですよ」

フレッドはアルバムを持ち出して、見せてくれる。月面のガッセンデュー火口の不思議な人口トンネルや、宇宙飛行士と月面の写真など、珍しい資料がぎっしりと収録してある。それを見ていると、小さなエリシアがチョコチョコとやって来てはアルバムをのぞき込んだり私の顔を見上げたりする。そのあどけなさはたとえようもない。でも『オジチャン』とか何とか言って親しく話しかけようとしなるところを見ると、異様な東洋人に見えるのだろうか。

ここで写真類を複写する。コピースタンドを持って来なかったのが残念だが、何とかうまくゆくだろう。

「私はこの場所でUFOの映画を撮影したんですよ」とフレッドが言っていて、興味深い話に変えた。「アダムスキーはよく言ったものです。『この生涯で君の親しい人はすべて前生のどこかで親しかったことのある人なのだ。偶然というものはあり得ない。そうでなければ今生で親しくなるはずはないだろう』とね」

久「それはわかります」
「私たちがヨーロッパを旅行したときに、英語が全然話せない人たちに会ったことがあって、しかも相手を家族よりも親しく感じたことがあるんです」

久「そんな体験は私にもありますよ」
フレッドが壁にかけてある円盤の絵を指さして、これはメキシコの友人が描いたものだの説明し、このような円盤がすぐ近くを飛ぶのを目撃したが、丸窓までが鮮明に見えたという。続いてイングリッドが日本GAPでは「生命の科学」の講義をやっているのかと尋ねるので、そうだと答えると、彼女はそれを人々に教えることよって過去世を思い出させることに成功したというような話をする。

過去世からの reincarnation (転生) の実態を知ること重要だろうが、最重要なのはまず「現在」を認識して、未来への希望と信念を持つことではないだろうか。前生で金星にいたということよりも今、隣家の貧しい人が米を買い金もなくて水ばかり飲んでいるとすれば、米を与えてやり、今後どうすれば生活を維持



●語り続けるイングリッド。左はスティーヴ。

私自身は信念とイメージを失わなかった。四十五年の正月、東京の奥地の寓居でただ独り座して静かに百二十円のポケットピンを味わいながら私は元日を祝った。金はほとんどない。往年の熱血漢・谷譲治の『テキサス無宿』を読みながら遙かなる国アメリカに思いを馳せていた。そのアメリカに今やつて来て、超高度な哲学を聞いている――。

ガッセンディー・クレターターの写真を複写するために居間から外へ出た。裏のヤード(庭)は広々として、まだ家を数十戸も建てる余地がある。地面に写真を置いて日光で照明しながら撮影を続けたあと、大空を見上げて思いきり深呼吸をする。

屋内へ入るとフレッドが面白い写真を指し示した。顔がよく似た二枚の人物写真があって、一方はローマのある権力者で、他方はジョンソン大統領である。フレッドがこの二枚の写真をスペース・ブラザーズとアダムスキーに見せたところ両方とも同一人物で、権力者がジョンソンに生まれ変わったのだと言ったという。アダムスキーによれば生まれ変わりによる「変化」は六十ないし九十パーセントだとイングリッドが説明する。

このあと彼女はある奇妙な「品物」を取り出して見せてくれた。もとアダムスキーが持っていた物で、これにより人間の過去世の記憶をテストすることができるとのこと。非常に興味深い物だが、この品物のことは他言するなと口止めされたので、省略しよう。ただ彼らが意外な物を所有しているということを述べた

いと思って、ここに少し触れただけである。また、別なある絵も見せてくれたが、これに対しても「緘口令」がしかれた。

このあとイングリッドがまたも超アンダンテで宇宙哲学を長々と講義し続けたが、密度の高い話なので退屈しない。そしてアダムスキーは偉大な慈悲心と忍耐力の持ち主だったが、ときにはカミナリが落ちたように怒ることもあったと話すので、なぜかと尋ねると、感情的になつて怒るのではなく、自分の説の正しさを主張するためののだという。

「アダムスキーは人々の心の中に小さな喜びを、人々の眼の中に小さな幸福を見い出そうとして、記事を書いたのですわ。……大抵の人は何も得ることができないために重苦しい気分になつていて、幸せになれるような何かちよつとしたことでも見つけようとしていますが、それは眼の中に現れます。魂は眼を通じて現れるからです。人間がそれを(幸せなもの)を見つければ、スペース・ブラザーズはもつとひんばんに地球へ来るでしょうが、現状ではこの世界は恐怖に支配されています。」

一九六五年にニューヨークで大停電が起こつたのを知っていますか？」

久「よく知っています」
 イ「あれはスペース・ブラザーズが起こしたんです。事件のあとでブラザーズが私たちに話してくれましたが、それによりますと、ブラザーズは地球人の心をテストするためにやったということです。不測の事態におちいっただけにどうなる

かを調べてみたんです。あの事件の結果を知っていますか？ 一般人の七十五パーセントは恐怖の反応を示し、二十五パーセントは冷静だったということです。いつかまた同じようなテストをすると言っていました。ですから私たちにはまだ沢山の仕事があるんですよ」

そうか、あの大停電はブラザーズのテストだったのか。理由なき停電と騒がれたが、一部のUFO研究家は円盤のせいだろうと言っていた。

アダムスキーは昔から コンタクトしていた!

私は話題を変えた。

「昨日アリス・ウェルズがクリスタル・ペンダントを見せてくれましたが、あれは何を意味するんですか？」

すると今までほとんど無言だったステイヴ・ホワイティングが説明した。

「あれはアダムスキーに与えられたものです。彼はあれを首のまわりにかけていました」

久「なぜかけていたんですか？」

ス「オーケー(と言って笑いながら)そうですね……アダムスキーはまだ小さかった頃……十二歳のときです……生涯肌身に着けていました。講演をしたり人々に語りかけるときはいつも胸につり下げているか、またはポケットに入れていました。あれに光をあけるとライトビームを放射します。増幅作用があるんですよ。だからブラザーズが彼にフィリッグを送るときはあのクリスタルが増幅す

できるかという問題を共に考えて具体策を講じてやるのが先決問題ではないだろうか、五年前、石も追われる如く東京へ出て来て、職がなくて貧窮のどん底に陥った当時を回想しながら私は複雑な気持ちで聞いていた。

しかしフレッドの話の聞くと、彼もこれに似たような苦闘を体験したらしい。メキシコからビスタへ移住したときは無一文で家財道具は何もなかったという。しかも苦境を克服して高貴な哲学を實踐している。やはり「思想」に優先権を与えるべきなのだろうか。

少なくとも、いかなる逆境に陥っても

るわけです」

久「あれはスペース・ブラザーズから彼に与えられたんです」

久「ずっと昔にですか？」

ス「そう、アダムスキーがうんと小さかった頃です」

久「あれを手に持つと熱くなりますわ」

ただし人によりますけど——」

久「あのクリスタルについてアリスに尋ねたら、『ミステリー』だと書いていましたよ」

ス「ほとんどの人にとってはミステリーでしょうね。だれにも理解できるものはありません」とステイヴは朗らかに笑う。

久「アダムスキーは人によって秘密を洩らしたり洩らさなかったりしたんです。あのクリスタルも同じことですわ」

スペース・ブラザーズから与えられたということになると、一九五二年以前にすでにコンタクトしていたのか、それとも相手をブラザーズとは気づかないで与えられたのか。この点をしつこく聞こうと思っていると、アシスタントが別な話を持ち出したので、私は会話内容などを説明することになった。

ひとしきり日本語で話し合ってから、あらためて『同乗記』に出てくるロサンジェルスのホテルのことを尋ねてみたが古い建物なのでもないだろうと言う。

イングリッドがまた話し始めた。

「一九五二年にアダムスキーが選ばれてコンタクトした件を、あなたは偶然だと思えますか？ 彼があれだけの円盤写真を撮影したのを偶然だと思えますか？」

久「思いませんよ」

久「アダムスキーは著書の中で、一九五二年に初めて金星人とコンタクトしたように書いていますが、あれは真実ではありませんよ（とイングリッドは語気を強める）彼はずっと昔からすでにコンタクトしていたんですよ」

久「アハン」と私は平静に英語流の返事をしたが、これはさっきから聞きたいことだったので身を乗り出した。イングリッドは私の想念を読み取ったのかナ。

彼女は一語一語をかみしめるように、スペース・プログラムとアダムスキーとの関係を説明してゆく。驚くべき内容であり、アリス・ウェルズが洩らしてくれた話と一致する。

久「スペース・ブラザーズは地球上に住んでいて、たとえば商店の店員にもなったりしていますが、お客さんの所へ来て『私の正体がわかりますか』などとは決して言いません。こちら側がフィリッグを持つ必要があります。そして相手の眼の中を読み取れば、その正体がわかるんです。なぜって、そんな人は他にいないからですわ。一度相手の正体に気づいたならば、相手の方から話しかけるでしょう。一つ例をあげてみましょうか。ワシントン市にいた当時、ある婦人が転生の問題について疑問を持っていましたので、私たちはある宇宙人が働いている店へ（解答をもらいに）行ったんです。そこへ入ってみるとだれかがその人に話しかけていました。しかもカメラを持っているんです。それで私たちは出直して別な夕方に行つて話し合いました。

意識は生命の連続です。決してとまる

ことはありません。ブラザーズ以上にこの問題をうまく説明できる人はいないでしょう。一生涯から次の生涯へ移るのに休止はありません。ブラザーズはこれを実に巧みに説明していました。たまたまブラザーズの所へ行つて疑問に答えて下さいと頼んでも、答えてはくれないですよ。なぜなら、彼らは地球人が「何を必要としているか」を知っているからです。『知りたい事柄』を聞こうとしてもだめなのです。ブラザーズは、こちらが

『本当に必要な』と知っていると当初は『くれるだけです。そうすると当初は『こんな事を知りたいんじゃない』と思うでしょうが、翌日になると、相手が与えてくれた知識が本当に自分にとって必要なものであることに気づきます。ですからブラザーズはよく知っているんですわ。彼らによれば、地球人が過去の記憶を保つのが困難なのは、各生涯を切り離して考えるからだというんです。つまり地球人は『この生涯』『あの生涯』というふうに分けますが、実際はすべてつながった一つのものなんです。大抵の人が『自分には過去の記憶などはない。自分がだれだったのかはわからない』などと言いますがこれは間違っています。

確実な記憶はあるんです。しかし前生と同じ生き方をしないように注意しなければなりません。これは最重要事です。そこで記憶を保つことが大切となってきます。記憶があれば同じ生き方をしないで

もっと向上するでしょう。

これは樹木みたいなものです。枝を生

やして幹を通じてエネルギーを吸収しては継続的なサイクルを終えますが、私たち人間も自然の生物とさほど異なりません。基本的には万物は全く単純なものな

んですが、あまりに単純なためにかえつてむづかしくしているわけです」

この人々は転生の問題をかかなり重視しているらしい。こうまで聞かされようとは思わなかった。明らかに次元の異なる人たちであり、もちろん一般人には全く通用しない話だ。室内の雰囲気はすばらしく快く、なごやかな高貴さに満ちている。

日本酒を飲む

フレッドが右手の台所へ入って、やがて顔をのぞかせながら、今日は『サキ』を買って来た、みんなと一緒に飲もうと言う。『サ』にアクセントをつけて発音するので、ハテナ、『サキ』とは何のこ

つちきい？ と思っていると、右手にビンをつかんで持ち上げて見せる。

なんだ、日本酒ではないか、よく見ると『菊正宗』というラベルがついている。ピスタの日本人経営の店で買ってき

たとフレッドが説明して、各人にグラスをくばり、注いでまわる。冷や酒だが、こんな場所で飲むととてもおいしい。スティューヴが、日本人はどのような方法で飲むのかと尋ねた。沸かすのだと言うと熱くして飲むのか、と驚いている。

イングリッドが少し飲んで頷をしかめるので、スティューヴが笑い出したが、彼も顔をしかめて、実に妙なものを飲んだ

というような表情を浮かべる、到底、彼らの喉を通るような代物ではないらしい。日本人は奇妙なものを飲む人種だと思っただろう。

フレッドは仕事があると言い残して出て行った。あとにはイングリッドとステイヴが同じ長椅子に並んで座ったままである。一服やってから私はまた質問を開始した。

ケイシーはダメと言う

「エドガー・ケイシーについてどう思いますか？」

「エドガー・ケイシーですって？ だめですよ！」

ス「だめ、だめ、よくないね」

イ「よくないわ。全然だめよ！」

これは意外である。二人が口をそろえて強調するところを見ると、全く問題にならないというところらしい。

久「だめですか？」

ス「だめですよ。あれは全くサイキック（心霊的）です。真実なものは何もありません。エドがやった事は全く良くありません。なぜなら彼は催眠法を用いたからで、催眠法はマインド（心）を取り去ってしまうんです。ところが人間はマインドを必要とするんですよ。これがなければ人間ではありません。エドは『マインドを取り去れ』と言っていますが、これは間違いです。大きな誤りです。彼は死にましたが、いわば自殺同然です」

ス「肉体の内部では宇宙の意識のエネル

ギーを用いたんですが、誤って応用したわけですよ。自分では気づかなくて、火のように体を燃やしたんです。わるいことですね。エドに似た多くの人がやはり体を燃やして死んでいます。」

宇宙の意識は精妙なエネルギーで、たいそう強靱です。それを応用すればするほど引つ張り込むことになり、ますます強くなつて、誤つて用いれば肉体を燃やしてしまいます。パワーですから、良い方にも悪い方にも使えるのです。アダムスキーはよく言っていました。エドのような人は宇宙の意識を悪い方向に用いたために、みずから破壊したのだ、と。

昔エドが若かった頃は老年時代よりも良かったんです。多くの人を救ったのですが、その後トランス（無意識状態）におちいり、すべてを失ってしまったのです。彼は若い頃は人々のためにずいぶん役立ったのですが、方法を知りませんでした。それで自分が理解できない物を用いる応用して、そのため傷ついたわけです。多数の書物を書いた晩年になるとその著書は混乱に満ちていますが、これは自分の行為を理解しなかったからで、そのために他人にも理解のできない方法を伝えています。これではだめです。

エドは生涯で多くの病人を救いましたが、これには二通りの方法があります。イエスは多くの病人を救いましたし、アダムスキーもやりました。この二人は意識の力の応用法を心得ていて、それで病人を治したんです。ところがエドはその応用法を知らず、違う方法で応用したんです。たしかに多くの人を助けけた

れども自分をも傷つけたわけですよ。彼自身は（宇宙の意識の）「道具」だった。その「道具」になる方法を知らなかった。それで自分もやられた。他人に教え始めたときは他人をも傷つけています。同じパワーのただれども彼はその応用法を知らなかったんですね」

イングリッドとステイヴが交互に熱をこめて語るところを見ると、単なる感情的表現ではなく、宇宙哲学の真理を基盤にした「大演説」であるようだ。そういえばアダムスキーの文献にはケイシーのケの字も出てこない。

大変動について語る

ケイシーの日本列島沈没の予言に関連して私は「同乗記」でブラザーズが地球の大変動発生に言及している箇所を思い出した。

久「同乗記」で述べられているカタストロフィー（破壊的大変動）についてはどうですか？」

ス「自然の？……それとも人為的な？」

ス「この地球の多数の人がいざれ大変動が発生するだろうと感じています。これには理由があります。いわゆるカタストロフィーは起こりませんが、自然現象はあり得るのです。地球は二万五千年ごとに磁極を変化させますが、今度は北極と南極が逆になるでしょう。そうすると、大洋が陸地に押し寄せ、海底の土地が隆起するでしょうが、これは非常にゆっくりと起こるでしょう。これはカタストロ

フィーではありません。しかし世界中で核爆発を続ければ地球内部を震動させ、きわめて急速に地球をよるめかせて、多数の人が死ぬでしょう。だが爆発をやめれば自然の変化は全くゆっくりと起こるだけなので、人間は他所へ移動する余裕をもつことになりません。たとえば、このカリフォルニアの大部分は海底に沈下するでしょうが、これは全く緩慢に起こるので、住民は安全に避難できますよ。これには少なくとも四、五百年かかるでしょう。しかし核爆発を続ければその沈下現象を次第に早めますから、急速に発生させる可能性があります。……そうだ、あの地図帳はどこに……」と言ってイングリッドを促す。彼女は立ち上がって奥へ入り大判の地図帳を持って来る。

ス「この赤い線は地殻の割れ目で、次第に大きくなっています。地球全体は大きくなっていますが、これは古い惑星であるためです。惑星というものは古くなればなるほど大きくなるんです。そしていつかは爆発して消滅するでしょう。」

この一本の線がカリフォルニアを通りもう一本が日本を貫いていて、これらは大きくなっています」

ステイヴが示す位置をのぞき込むとたしかに赤い大断層らしき線が日本列島を縦断している。

「しかし地下核実験をやらなければ、当分起こらないでしょう」と言っていてステイヴはなおもカリフォルニアの大断層線と核実験との関係を力説し続ける。二人の話の科学的根拠ははっきりしないが、うがった事を言っているようにも思われ

る。
「エドガー・ケイシーの予言によれば、日本列島は遠からず海中に沈没するのだそうです——」と私は切り札を出してみた。

ス「それでですね、しかし非常にゆっくりと起こるでしょう」

これは有難い話だと思つて私は一安心した。

「ね、クボタさん。地球が磁極を変えているあいだにマグネティック・ラインも変化します。すると人間はこのラインの一部なので、心も何となく不安になってくるんです。人間は自然の一部であるために原因に気づきませんが、もし気づけば心と肉体は自然に従つて調整するでしょう。でも原因がわからねば……」

だから人間は今日の世界で何とも言えぬ不安にかられるんです。人間の理性は狂つてきています。しかし原因に気づくなら自分を正しい状態にして悩みを解消できるでしょう。人間は自然の中に生まれ出るわけですし、自然はそれ自体を正常化しようとしています。それによって人間も自分を正常化させようとするのです。とにかく、何が起つているかに気づきさえすれば、人間は現在以上に正常化できるのですわ」

イングリッドはまた奥へ入つて書類を持ち出した。アダムスキーがこの問題について書いたものだという。

「この記事はアダムスキーが書いたもので、地球が変化しつつあるあいだに人間がどのように感じるかを説明したものです。彼女も言ったように地球は巨大な

マグネットで、北極と南極が別々にあります。人間の肉体も同様で、頭が北極、足が南極です。だから地球が変化するにつれて人間も内部が変化します。人々はときどきイライラしたり疲れたりしますが、これは地球の変化のためです。このことがここに書いてあるんです。これは差し上げますから持つて帰つて日本語に翻訳し、あなたのGAP機関誌に掲載して結構です。これらの記事をみな持つて帰ちなさい」と言つてステイヴはコピーした記事類をごっそりくれた。私は感謝して受け取つた。

四合ビンの琥珀色の液体を少しグラスに注いで飲むと、私はタバコを吹かし始めた。窓外には暮色がたゞよい、晩秋の空は少し暗くなつてきた。イングリッドとステイヴは私たちを無言のまま凝視している。心中にはさまざまの想念が去来する。長い沈黙が続いた。あまりに静寂なので少々きまりがわるい。何か言わねば格好がつかないな、と思つて、また質問した。

なぜブラザーズは来るのか

「第三次大戦についてはどうですか？」
ス「だれにもわかりません。起こるかもしれないし、起こらないかもしれない。まあ起こらない方がいいですね」

「アダムスキーは死ぬ前に次のように言つていました。『もし我々が一九七〇年までに無事に過ごせれば、大丈夫だろう』と。また『ブラザーズは一生懸命に働いていくるので、第三次大戦は起

こらないだろう』とも言っていました。この戦争は核戦争になるからです。地球人が核爆弾を使用すれば地球が傾き、マグネティック・フォースと一致しなくなることをブラザーズは心配しています。そうなるのと他の惑星群にも影響を及ぼすでしょう。

というのは、万物は一体化して一本の線になつていくからです。これが基本となつてスペース・ブラザーズが地球へ来るんです。アダムスキーは言っていました。『私が今後別な宇宙船を見ないとしても、彼らが地球のために活動していることはわかっている』と。たとえば、 $\Delta\Delta\Delta$ 問題を記憶していらつしやるでしょう。 $\times\times\times$ が $\Delta\Delta\Delta$ にミサイル基地を建設中だという事実をだれが米政府に知らせたか知っていますか？ あれはスペース・ブラザーズですわ。 $\times\times\times$ がミサイルを持ち込むのをブラザーズは目撃したんです。ブラザーズはソ連やアメリカのいづれにも反対しているのではなく、核戦争に反対しているんです。地球の極が変化する一方、すでに多くの諸問題を抱えていますので、核戦争を始めればあらゆるものがメチャメチャになります。だからアダムスキーが言ったんです。『もし一九七〇年まで我々が生き伸びれば大丈夫だろう』と。その間に三度戦争がありました。朝鮮戦争、イスラエル・アラブ戦争、ベトナム戦争です。これらはブラザーズが世界大戦にならないように必死になつて食い止めたんです。ですから第三次大戦も起こらないでしょう。もし起こればブラザーズも滅亡するんですもの

「地球がバラバラになれば、全惑星群も崩壊するでしょう」
「ね、クボタさん、アダムスキーは私たちにこう言っています。『天と地とは過ぎ行くけれども（筆者注：消滅するけれども）私の言葉は（精者注：真理は）決して消えることはない』』というイエスの言葉を引用して、あらゆる太陽系は十二個の惑星から成り、あらゆる宇宙は十二個の太陽系から成っていると（筆者注：この宇宙というものは銀河系ではなくて十二個の太陽系単位を意味するようだ）。そして私たちの宇宙には十三個の太陽系があり、このことは、現在のこの太陽系が消滅する運命にあつて、すでに新しい太陽系ができていくということなので、アダムスキーによると、この新しい太陽系には二百万の人が住んでいるのだそうです。ですから現在の太陽系はたいそう古びていて、ゆっくりと確実に崩壊してゆくんです。この地球が誕生したときはもっと小型でしたが、今は膨脹しています。全太陽系もこのような状態にあります。たしかに崩壊の過程にあります。でもこれは自然現象です。だからこそスペース・ブラザーズは地球人に大気圏外へ進出させようとしていくわけで、崩壊しても別の惑星に住めるんです。でも現状ではだめだわ。スペース・ブラザーズはすでに金星、火星、土星などから住民を新しい惑星へ移動させていますが地球では何もやっていないもの。ですから突然核戦争を始めると、ブラザーズは地球人を大気圏外へ救出するほどの宇宙船を持

たないので、どう仕様もないでしょう。だから彼らは言ったんです。『地球人は宇宙空間へ進出しない』と。しかも私たちが一九五二年にスペース・プログラムを始めたとき、地球自体に関しては何も知りませんでした。しかし大気圏外へ出るようになるのと同じに地球や海洋その他あらゆる事がわかってきたんです。私は一九六〇年にある映画を見ましたが、それは宇宙飛行士が作った最初の映画で、海水の流動状況を示すものでした。こんなことはそれまでわからなかったんです。これは非常に重要なことです。それは私たちの首をつなぐばかりではなく、知識を得るのに役立つんです。どうしても大気圏外へ出る必要がありますわ。もちろん、戦争を起こそうとするあの種の「力」が存在するけど、ブラザーズはいつも必死になって活動していますから、戦争は起こらないでしょう。

アメリカ政府指導者の多くの人はこのことを知っています。というのは私たちは(ステックリング夫妻は)政府へ行き関係者と会い、(円盤の)映画を見せたからです。一九六五年にアダムスキーは死ぬ前に言いました。『私はニューヨークの国連から議席を与えようという申し出を受けた』。当時設けられていた宇宙問題委員会の議席ですが、今は廃止されています。彼は一九六五年一月四日に国連へ行き、それからワシントンへ帰ったんです。それで、議席を承諾しましたかと尋ねたら、『ノウ』と答えるんです。これは同委員会が彼に沈黙を守ることを約束させようとしたからです。『私が言

いたいことを黙っているわけにはゆかない。真相を大衆に話さねばならない』と言っていました。お金やオイルなどと引き替えに戦争を起こすわけにはゆきません。もし本当に戦争を起こせば、あとには何も残らないでしょう。だからアダムスキーは言っていました。『もし戦争になれば、世界の人間の九十九パーセントは次の世に生まれ変わらないうら。そのまま消滅してしまうだろう』と。これは地球人が自分の正体を知らないからです。全く無関心なのです。したがってスペース・ブラザーズは二つの物事を行う必要があるんです。一つは地球人の向上を図るための教えを伝えること、一つは地球や太陽系で発生している事を伝えることです。これは大仕事ですわ。ですからブラザーズが地球へ来ていることにもっと感謝すべきです。もし来なかったらもっと悪い状態になっていたでしょう。たしかに彼らは戦争を起こさないようにあらゆる努力を払っています。ブラザーズは、私たち地球人が銃で互いに殺し始めても気にしないと云っています。地球人がそんなことをしたいのは、地球人自身の問題です。しかし核戦争を始めるなら、これは彼らの好まないところですよ。連鎖反応を起こすからですわ。水中に石を投げ落とせば次第にさざ波が広がってやがて水全体が動き始めるのと同じです。この地球をだめにすれば、太陽系全体がだめになるんですわ。

アダムスキーは言っていました。『アメリカ政府ではたいしたことではできない。各国が連合しなければだめだ。だか

●左より久保田、スティヴ、(その前) グラン、イングリッドとエリシア、瑠。



ら人々はこれにそなえて自分の正体を知る必要がある。そうすれば人間はどこへ行こうとしているかがわかるだろう。人間が自分の正体を知らなければ、消滅して、存在しなくなるだろう。イエスも言っています。『あなたの肉体を作った人に気づきなさい。しかしそれ以上にあなたの魂を作った人に気づきなさい。』魂が残らなければ本人も存在しなくなり。それで、スペース・ブラザーズが地球へ来て状態全体に眼を通して、人々に伝える教えの必要を感じたわけです。これは一九五二年にアダムスキー氏へ伝えるよう決められたときです。……ブラザーズは地球全体の人間の心の状態を調べて、アダムスキーに生命の科学コースを授けました。

アダムスキーは言っています。『あなたがたはこれ(生命の科学)を生かさないさい。これについて話し合うのはやめなさい。これを他人に伝えなさい。そうすればこの地球が何をやっていようと、あなたがたは宇宙のどこかへ行けるでしょう。自分の正体がわかるでしょう』

魂の底からほとぼり出るようなイングリッドの熱意の溢れた声に私は感動した。この女性も高次な惑星から地球へ来た人なのだろうか。その顔は輝きに満ちている。

続いてイングリッドはある大統領や米政府とアダムスキーとの関係について驚異的な話を始めた。私には全く初耳である。そして某事件のくだりになると、録音テープの回転を中止するようにと要求した。したがってここでは再録できない。

い。ロッキード事件の国会喚問証人にならって「記憶にごさいますせん」と言うよりはかない。

イ「みんな全く盲目ですわ」

久「宇宙人のなかには良くないものもいるのですか？」

イ「そうです」

ス「地球と同じですよ。良い人もいれば良くない人もいる。同じことです。良い惑星もあれば良くない惑星もあります」

久「この太陽系にですか？」

ス「そう。他の太陽系でもです」

久「我々の太陽系には良くない惑星があるんですか？」

ス「全部が悪いわけじゃなく、さほど良くないものもあります」

久「火星？」

「そうですね……他にもあります」とステイヴとイングリッドが異口同音に答える。

ス「木星や水星などです」

久「どうしてこんな事を知っているんですか？」

ステイヴとイングリッドが顔を見合わせて笑う。いったいにステイヴは沈黙がちな人だが、笑うときは明朗だ。

イ「そうね、まずアダムスキーがそう言ったわ。次に、私は彼らに会ったのよ。スペース・ピープルに……」

人間の想念とフィーリングは二種類に分けられます。だからあまり良くない宇宙人に会うこともあるんです。立派な宇宙人もいます。だから宇宙人が地球人を傷つけたというようにいろいろなUFOストーリーもあるんです。たしかにそん

な事もあるんですが、それはアダムスキーの言う宇宙人とは違いますわ。別な宇宙人ですわ。善悪二種類あるんです」

久「フーン、二種類ですか……」

イ「といっても、本当の悪ではありません。たとえば、あなたに家族があつて、二人の子供がいるとします。一人はあなたの好きな事をやりますが、他の一人はたいそう善良だとします。そこで良くない方の子供のしつけをすることだけが必要となり、他の子供は放っておいてよいこととなります。家族でさえ同じこと

があるんですから理解は困難ではありません。したがって心の中で毎日私たちがやっていることは『戦い』です。フィーリングはこれをやれ、あれをやれと言いますが、マインド(心)はなぜやらねばならないんだ、こんな事はしたくないと言つて抵抗します。だから人間はすでに分裂しているんです。心はフィーリングの命令を遂行するためにのみ存在するべきです。だから何かのフィーリングが起

こつたら、それをやるべきです。疑惑を持つてはいけません。ところで、この太陽系にはフィーリングを起こさない人々もいて、『フィーリングが何だ、オレはやりたい事をやるんだ』と言つたりします。地球人もそう言っているんですから彼らも同様です。奇妙ではありません。アダムスキーは著書『テレパシー』の中でそのことを非常にうまく説明しています。地球人だけがユニークなのではなく宇宙人もみな同じです」

ス「アダムスキーの『土星旅行記』にもそのように書いてありますよ」

イ「私たちが別な惑星へ行つてその住民と友人にならなくても、銃を持った別な惑星人がそこへ来ていて、『オレはこの惑星を征服したいんだ』と言うかも知れません。同じことですよ」

二人の説明によると、この太陽系の全惑星が必ずしも金星や土星のように高度な発達をとりあげているのではないというところしく中には警戒を要する惑星もあるのだから、それにしても地球だけは度外れて程度が低いという意味のようだ。

ノストラダムスは必ずしも的中しない

私は話題を変えた。

「ノストラダムスの予言についてはどうですか？」

ス「そうですね、彼は多くの予言を行っています。真実なものもあるし、そうでないものもあります。彼が予言をしたのは、現代の地球みたいな文明社会に住んだことや出来事を記憶しているからです。そこで同じ社会が来るならば同じような事が起こるだろうと考えたわけですね。記憶していたからこそ多くの真実の予言をしたんです。人間がどんなふうに物事をやるかを彼は知っていたので、予言が的中したりしなかったりするんですよ。……あなたはアダムスキーの『土星旅行記』を持っていますか？」

これは高文社刊の拙著『空飛ぶ円盤とアダムスキー』に収録してある。

ス「その中で彼は木星、水星、火星について述べています。ずっと大昔、彼らは

地球へ来て多くの戦争をやったが、現在も同じことをやっているというんです」「ケネディー大統領がまだ生きていた頃のある夜、全世界に偉大なフィリングがあったことを憶えていますか？ 人々が今よりもっと自由で幸福だと感じた夜です。その理由を知っていますか？ スペース・ピープルが絶えず愛や理解の想念を放射していたからですわ。彼らは万物を一体化させようとしていたわけです。したがって同じ事が起こるかも知れません。ところが他の宇宙人で不調和の想念を放つのもいます。そこでそのことを知らない地球人はその想念を受け入れるわけですが、自分がだれのことを考えるかを考えているかを知っていれば、小さな事に夢中にはならないでしょう。ところがこの事は現在起こっています。なぜなら地球人は心というものについて知らず、その働きや反応も知りません。しばしば人はフィリングを起こしますがそれに気づきません。人間が自分の心でもってフィリングに気づく方法を知らない限り、さまざまな考えを起こして、ああでもない、こうでもないと思ってしまう。まあ大丈夫だろうと片づけまます。大抵の人はフィリングを起こすんです。ただそれだけのことで、立ち止まるんです。そのフィリングに従って何をやればよいかがわかるようにならない限り、何もなりません。

「生命の科学」の最も重要な個所

以上の事をアダムスキーが常に教えて

きたんです。『自分自身を知るようになさい』と。何事が起こった場合、少なくともどこへ行くべきかはだれにもわかるはずだと彼は言うのです。

彼は死ぬ数日前に私たちを部屋へ呼び入れて次のように言いました。

『君たちがテレバシーを研究するのなら「生命の科学」の第一課と第九課が最も重要だ。「宇宙哲学」も研究しなさい。そうすれば行きたい所へ行けるようになる』

しかしスペース・ブラザーズは「生命の科学」の第一課と第九課が最重要だと言っていました。第九課には人間の習慣細胞や習慣の蓄積によって結局全身が食いつくされ、最後はマインド（心）だけになって、フィリングを持たなくなる様子が説明してあります。これを認めるならばフィリングと共に生きるようになり自身を変化させ、悪習慣のかわりに良い習慣を発達させて、自分自身を知るようになります。

大抵の人が『自分は前生の記憶がないよ』と言いますが、これは自分が良くなるかと思いがながらもそうしなかったからで、それで記憶がないと言うんです。でも記憶を保てるのです。死んで眼を閉じるとき幸福な想念を持つならば、次の生涯でそのように眼覚めます。ちょうど夜眠るときに怒ったままで眠ると、翌朝やはり怒ったままで眼覚めるのと同じですわ。別な例をあげると、戦争があつて兵士が互いに撃ち合い、殺し合います。殺された人は次の生涯で十九歳位に生長して、だれかを殺します。なぜ殺したのか

本人にも理由がわからないことがありますが、これは前生で死ぬときに殺してやりたいという想念を持ったまま死んだからです。だから現代社会で非行少年が増加しているわけです。かつて戦争に行つたときは殺人が許されていて、次代で生まれ変わつてから心にあるものは、死ぬときに持っていた自己防衛の想念の持続です。恐怖心や憎悪に満ちて死ねば、またそのような想念を持って生まれ変わります。そしてまた戦争をするのです。これでは制限がありません」

イングリッドは尽きることなく壮大かつ深遠な宇宙哲学を展開するが、時間には制限がある。窓外はいつしか暗くなり室内は電気スタンドの照明で明るく輝いている。

そろそろ出かけようかとステューブが促すので、私は立ち上がりて丁寧に謝辞を述べ、ステューブのあとについて外に出た。戸外に置いてある彼の車に乗り込んで一路アリスの家へ飛ばして行く。夕食をご馳走になるためだというのが、どうも気がひけて仕方がない。しかしまた何かの情報、資料等に接するかもしれないと思ひ、意を決して再度訪問するのことにした。

またアリスと話す

財団へ到着して広間へ入ると、見知らぬ老婦人が座っている。アリスが紹介して、この人はエイドリアン・ムンクバードだと言う。ああ、この女性がエイドリアンなのかと、一瞬意外な感じがした。

常日頃、財団の機関誌「コスミック・プレティン」に寄稿して好論文を発表する婦人で、名前だけはよく知っていたが、お眼にかかるのは初めてだ。もつと若い中年女性かとばかり思っていたので、戸惑いながら挨拶をかわして話し始めた。

年の頃は七十歳代だろうか、すでに白髪で、眼鏡をかけた小柄な婆さんだが、聞くところによるとと独身で、以前はニューヨークに住んで多年会社勤めをしていたが、アリスを援助するためにビスタへ来たという。年齢を尋ねると、微笑して「言えない」と答える。しまった、私は後悔した。この不作法者がと相手は内心立腹したにちがいない。そのせいかそれからとはあまり話そうとしないので、ますます私は気になりました。まあええわ、日本人なら元気な婆さんの年を聞いて、相手が答えると、何とまあお元氣ですなア、十歳ぐらいお若く見えますよとか何とか、相手を嬉しがらせるようなお世辞を言うのは悪いことではないのだから、これは単なる習慣の相違だ、いざれわかつてもらえらるだろうと、理屈をつけてディナーにのぞんだ。

彼女も同席して五人で食事を始めたが、私は主としてアリスと話し合った。今夜の話題は日本のことに集中したので Believe it or not (信じようと思ひまいと)と前置きして日本には大学が短大を合わせて約九百校あると話すと、さだめし驚くと思ひのほか、白人女性たちはケロリとしている。アメリカの高校なみにしか思っていないのだろうか。そうなれば別な面で国威を發揚させようと思ひ、



●金星のシンボルマークのペンダントを見せるアリス。

日本はカリフォルニアよりも小さな国だが、たいそう科学的な国だ、なぜなら狭い国土に一億以上の人間がひしめき合っているのだ、科学技術に頼らねば生き残れないのだ、その例はこれこれで、こういうすばらしい物も開発されている、等々例をあげて話すのに、さっぱり反応を示さない。どだい現在の日本という国を問題にしているのか、それとも関心がないのか、あるいはGNP世界上位という国力のために大変な大金持ちの国だと考えているのか、どうもわからない。しかし東京からロスまで何時間を要し

たかというアリスの質問に対して、九時間だと答えたときは、三人の婦人が一緒に驚きの声を発した。そんなに早く来れるのかと、信じられないという顔つきを示す。ここぞとばかり、世界が次第に狭くなってきたし、日本もすっかり欧米化されて生活文化がほとんど西洋風になってきた、女性はキモノを着ないで洋服を着て靴をはいている、いつときミニスカートの大流行した、西洋のファッションがそのまま日本でも流行するのだ、などと話す、さすがにアリスが関心を持ち始めて、なんだかんだと質問するが、そ

の内容から察するに、どうやら彼女の日本という国のイメージは明治初期の文明開化時代のそれらしい。無理もない。アメリカ人のなかにはまだ日本を中国の一部だと思ったり、東京をホンコンの近くにある小都会だと思っている人が沢山いるのだ。よく問題になることだが、外国の教科書にはいまだにチョンマゲをゆつて刀を腰に差した日本人のイラストが載ったりするというから、そんなに洋風化されたのかとアリスが驚嘆するのも当然だろう。日本政府は何をやっているんだ、もっと対外PRをやらんかいな、と私は慨嘆せざるを得なかった。

広間へ移動してから、またア氏の問題を語り合ったが、格別重要な話が出なかった。夜も更けて十時近くステイヴが迎えに来たので別れを告げて外へ出た。エイドリアンも一緒に車に乗る。走り出したと思ったら間もなく彼女の家の前に着いた。すぐ近くに住んでいるらしい。別れの言葉をかわしてから彼女は車を降りる。私たちは暗闇の中をぶっ飛ばしてオーシャンサイドへ向かった。

ロイヤル・インの駐車場へ車をとめて外へ出る。夜の冷気がさわやかだ。車のそばで別れようとするステイヴが私を引きとめてアダムスキー問題を話し始めた。その内容が次第に重要化していく。更にア氏と親しかったかつての高弟たちの話になった。ハンス・ペテルセン、シャロット・ブロップ、アリス・ポマロイ等が話題に出てくる。初めて聞く珍しい内容なので興味深く耳を傾けたが、立ち話ではいけないと思い、私の部屋へ

入らないかと誘うと、行こうと言う。外側の階段を昇って部屋へ入り、椅子に腰をおろし、三人が相対座する。久「あなたの職業は何ですか？」ス「アナウンサーです。テレビやラジオのね」

道理でこの人の英語は発音が非常に正確だ。まるで日本語を聞くように耳に響いてくる。米人でも正確に話す人、不正確な人等いろいろいるのは日本人の場合と同様である。私の日本語の発音はむしろ曖昧なことは自分でもよく承知しているが、その不明瞭さが英語をしゃべる場合は都合のよいこともある。

きれいな英語ですなアと言ってほめると、スペイン語も英語と同じぐらいにやれるとステイヴが言う。もともとこの人はブルーネット（髪も眼も黒い人種）なので、ラテン系なのかもしれないが、個人的なことは避けるようにした。

ここでも彼は転生の問題をしきりに話し続けて、私（久保田）とフレッドは過去世で親しい間柄にあったと言い、瑯君はステイヴと二度ほど親しかったと説明する。確証がないので、ああそうですかと答えるより他に仕方がないが、話を聞いているとステイヴも過去世を読み取る力を持つらしい。それがサイキックなものかどうかは私にはわからない。瑯君に伝えたいことが沢山あるようで、その都度私が通訳をする。こうして十二時近くまで対談したあと彼は静かに帰って行った。

あとはしばし独りで黙想する。さまざまにまな想いが浮かんで眠れない。



第2部 青きパロマーの空

パロマー山へドライブ

翌朝は早くから眼が覚めた。今日はパロマー行きだ。期待に胸をふくらませながら身仕度をととのえて、室内外をあちこちと歩きまわる。私も埴君も少食なので朝食をとらないことになって待っていると、約東の十時きっかりにドアをノックする音が聞こえた。あけてみるとステイヴが立っている。三人で外へ出ると車のそばでフレッドが待っていた。空は快晴であらゆる物が明るく輝いている。朝食をとれ、待っているから、とフレッドがすすめてくれたが、いや不要だと答えて車に乗り込み、パロマー目指して出発した。目的地まで約一時間かかるだろうという。町を走り抜けながらフレッドがあちこちの建物について説明する。スペイン風の大きな白い建物を指さして、あれは病院だと言う。そこを通過したあたりで急にフレッドがUFOじゃないかと叫んで車を停めた。窓越しに空を見ると白い物体が数個、尾を引きながら飛んでいるのが見える。ジェット機ではないかと思ったが、それにしては全く音が聞こえない。結局、何だかわからぬままにまた前進した。人家がまばらになって車は次第に郊外へ出て行くらしい。そしてハゲ山がやたらと眼につく。このあたりの山には樹木はないのかと尋ねると、もつと奥地の高所へ行くと森林地帯になると言う。いつしか山道へ入っている。二車線の舗装道路がうねりながら山々の間を縫っており、うっそうと茂ったあたりの風景は日本の高原地帯とよく似ている。

何とかならぬ。観光道路を登山バスで行くのと大差はない。ときどきドライブインのレストランらしきものが路傍にあたり野菜や果物のなかば露天化した店が見えたりして、大きな紙に記した手書きの看板が張り出してある。人間の生活はいずれも同じだな、違うのは言葉や文字ぐらゐのものだと思いつながら進んで行くくと、映画の「イージー・ライダー」の主人公と同じようなオートバイに乗った青年が我々のあとから追い越して行く。「イージー・ライダーだ！」と私が言うと、ステイヴが高らかに笑う。この青年もオートバイで旅をするらしい。相当なスピードだ。インディアン部落や放牧場などを通り越して、かなりの高所へ来た頃、前方の左に *Camping Ground* と書いた大きな看板が見えた。

「さあ、来ましたよ。ここがパロマー・ガーデンズです」とフレッドが言って、粗末な丸太の門みたいな所から左折して車を停めた。

パロマー・ガーデンズ跡を見学

外へ出て見渡すと、広々とした台地が展開して、あちこちに大きなカシの木が生えている。地面は道路側から奥へむかってゆるやかな昇り坂の傾斜になっており、意外に殺風景だ（上の写真）。ガーデンズと名づけられていたからには全面緑の芝生か草で覆われているのだろうと想像していたがイメージは違っていた。赤茶けた地面はでこぼこで、見映えがしない。現在はキャンピングカーの駐車場



●パロマー・ガーデンズへ入るフレッド（左）と久保田。

木造小屋

「あの木造小屋はアダムスキーが自分で建てた物置小屋ですよ」

フレッドが説明するので、見ると、敷地から少し離れた上手に粗末な小屋がある。どうみても立派ではない。

「アダムスキーが取り付けたパイプも残っています」と言うのでよく見ると古びた鉛管が小屋の下方にあった。水を引くために敷いたのだという。都会地にいる我々から見れば原始的だが、一九五二年頃、人家のない山奥のこの土地で素人が家を建てるのはかなり困難だったろう。

「その小屋からレストランの方へかけてセメントの小道がありますが、これもアダムスキーが作ったものです」

なるほど約十メートルほどのセメントの道らしい跡が残っている。カメラを構えてしきりにシャッターを切っていると上手から男の音が響いた。

「やあ今日は。写真を撮っているんですか」

見上げると三十歳位で口ヒゲを生やした背の高い男が立っている。だが彼は私を東洋人だとみたのか、それ以上は話しかけようとしな。フレッドとステイヴが近寄って男と話し始める。私もそばへ行くと、男が言った。

「面白いものがあるから見せてあげましょう。こちらへ来なさい」

一同が小屋の正面側へまわると、男はしゃがみ込んでコンクリートのタタキの上のゴミを払いのけた。

「ほら、円盤ですよ！」

のぞき込むと、たしかにコンクリートに円盤の絵が刻み込んである！

「アダムスキーがやったんですよ。いい記念になりますなア」と男は笑いながら説明する。この人は管理人で、アダムスキーの事は熟知しているらしい。善良そうな人で、この場所へ今もアダムスキーを慕って来る見学者が絶えないために、この小屋だけは記念に保存してあるのだという。コンクリートの彫刻はフレッドもステイヴも知らなかったようだ。

二人が管理人と話し続けているあいだ私はあたりを歩きまわった。何を見てもアダムスキーの貴重な波動を帯びているような感じがする。今、むこうのカシの木陰から彼が微笑しながら出て来るので

はないか……。

陽光は燦々と輝いて木々の緑は美しく空はあくまでも青く澄み渡り、小鳥のさえずりが響いて、清浄な雰囲気は心身ともに浄化されるような思いだ。

宇宙人が手伝った！

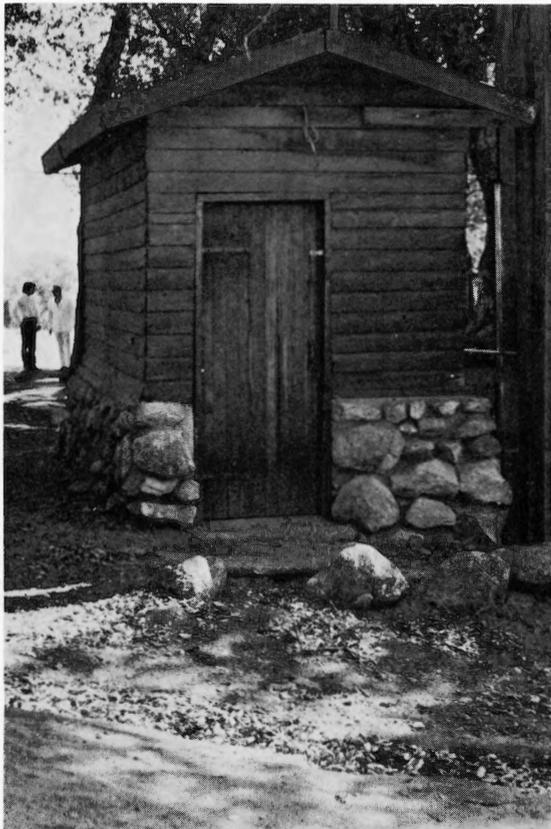
フレッドが近づいて来て、小屋のパイプを指さしながら話す。

「このパイプを取り付けるときには宇宙人が手伝ったんです」

地球人と宇宙人の合作による作品なのか！ けれどこれ以上の名作はないだろう。

レストラン跡のコンクリートの敷地のそばにはカシの大木がある。この木をア

●アダムスキーが建てた木造の物置小屋。





●コンクリートに刻まれた円盤の絵。



●アダムスキーが立っていた位置の筆者。

ダムスキーは心から愛していたとフレッドが言う。主のない巨木はかつての住居跡を忠実な老犬のごとく見守っているかのようだ。

広場の方へ出て奥を見渡すと、あちこちに樹木が植えもあり、その周囲を柵で囲ってある。アダムスキーがいた頃はこれほどに樹木はなく、もっと広い感じの台地だったらしい。十五インチの私設天文台のあったあたりを尋ねると奥の方の小舎を指さしてあそこだとフレッドが言うので、原著でアダムスキーがその天文台をバックにして立っている写真を思い

出し、彼が写っている位置の見当をつけて、そこに私が立った光景を瑠君に撮影させた。

円盤が飛んで来て金星文字の写ったネガホルダーを投下した位置はフレッドにもよくわからないらしく、アリスやマーサも近くで見ただけで、彼女らをつれて来れば判明するとフレッドが言うが、大体の飛行コースはあの奥の十五インチ天文台のあった方向から飛来して、道路をへだてた向こうの平地のベーカー軍曹の家をすれすれに飛び、超低空で反

対側の山を越えて飛んで行ったのだと説明する。見ると廃屋になっているベーカー氏の家がある。ここで氏はガーデンズから飛来した円盤を大写しに撮影したのである。原著では *valley* (谷) となっているので、深い谷底になっているのかと思っていたが、そうではなく、山と山のあいだは広い広地で、これを *valley* というのらしい。

その方向を撮影し終わったあと、フレッドがこの奥二百メートルばかりの所にアダムスキー・グループがガーデンズか

●小屋に付属するパイプ。



ら移動した家が残っているので行って見ようと言う。

一同は車に乗り込んで、いったん道路へ出てから奥の方向、つまりパロマー天文台の方向へ約二百メートル行って、左折してから小道へ入った。林の間をゆっくり進むと左方にわりときれいな木造家屋が見えた。これだ、とフレッドが指さす。停車した車内から窓越しにカメラを構えると、他人の家を無断で撮影するとプライバシー侵害の問題になるから気をつけろとフレッドが言う。車内からなら



●小屋のそばで管理人の説明を聞く。

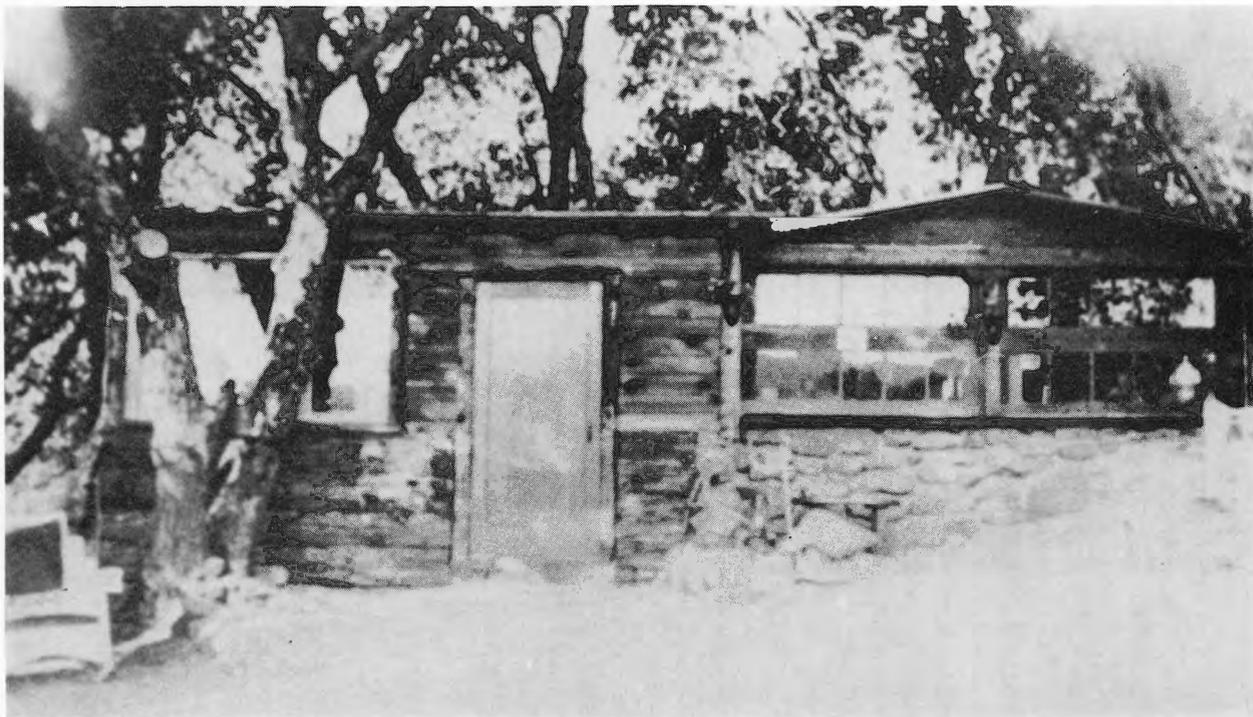
●左より塙、スティーヴ、フレッド、久保田。





●レストラン跡にて。背後はカシの大木。

●往時のレストラン。上の写真のカシの木が左方に見える。





●パロマー・テラセズのアダムスキーの家。

気づかれないだろうと思ひ、早業で二枚ほど撮ったとき、家の裏の窓から女性らしい人影が急に奥へ引っ込んだような気がした。しまったと思つたら、すぐ引き返せばよいのにフレッドが車を前進させて家の前側へまわしたので、その家の主らしい若い男が飛び出て来て何をやってるんだと怒鳴った。フレッドが恐縮したような顔をして、この家はもとジョージ・アダムスキーの住居で、自分たちは彼の知り合いだった、それで見に来たんだ、あなたはアダムスキーを知っている

●上の写真の家にいた当時のアダムスキー。



か、と聞くと、男は知らないと言う。しかし納得したような顔をしたので、フレッドが詫びて、車をまわし、再び舗装路へ出てパロマー天文台を目指し、ドライブを開始した。二十年も経過していればア氏の本でも読まない限り今の若い夫婦はアダムスキー問題を知らないだろう。車は曲がりくねった山中の道路を次第に奥に進んで行く。天文台を見学した帰りの車とときたますれちがうが、さほど頻繁ではない。

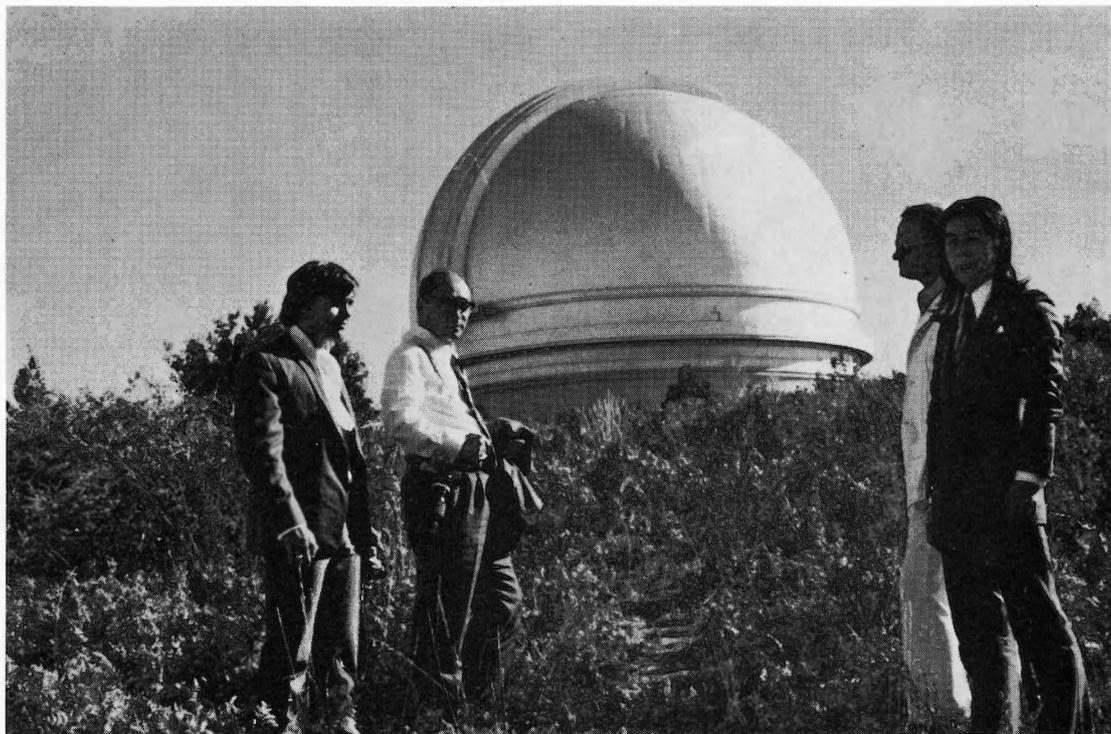
やがて道路の左側にレストランらしい建物が見えてきた。ここで昼食をとろうとフレッドが言う。そういえばかなり空腹になってきた。よかろうというわけで車をとめて中へ入って行く。木造の粗末な建物だが、内部は広くて、汚いテーブルがあちこちにある。フレッドの話によると、パロマー・ガーデンズのレストラ

ンを閉鎖したために、ここで別な人が経営を始めたのだという。立ち寄る客はすべてパロマー天文台の見学者である。老若男女の白人ばかりで、東洋人は全く見当たらない。食事が来るまでしばらく話し合ったが、どういふわけか我々のテーブルには食事を持って来ない。待てど暮らせど持つて来ないので、フレッドが交渉に行くと、やがてヒゲを生やした三十三歳なかばの主らしい男が丁寧に詫びながら飲み物や皿に盛った馳走を運んで来た。ビールを飲めとフレッドがすすめるので、少し飲む。日本のビールとは味が違う。みるとフレッドもビールを飲んでるので大いに驚き、あなたは運転者ではないか、運転者がアルコールを飲んでよいのか、と聞くと、フレッドは平然としてグラスを傾けながら、この国ではドライブの途中で店へ立ち寄ってビール

を飲む位は大丈夫だと言う。日本だったら罰せられるだろう、日本は交通法規が実にきびしい国だと話したが、フレッドもステイヴも全く反応を示さない。やがて食事をすませて再び車に乗り込み、更にドライブを続ける。一体こんな深山中に世界最大の反射望遠鏡があるのかと奇妙な感じがするほど高山の奥へと入って行く。

パロマー天文台を見学

やがて、あれだ！ という声に前方を見ると、山の頂上から白いドームがチラとぞいでいる。撮影しながら前進するとまもなく駐車場へ来た。沢山の車が置いてある。ここで降りてから更に小道を歩くのである。しばらく行くと右側に小さな博物館らしい建物があるので、一同で中へ入ってみる。天体写真が陳列してある。そこを出て更に数百メートル行くと白亜の大ドームへ着いた。想像したほど巨大な建築物でもない。内部へ入ると大勢の見学者がいて、わいわい騒ぎながら右往左往している。周囲に手すりがあるってそこから中へは入れない。内部は薄暗く、径五メートルの大反射鏡を収容した望遠鏡は少々グロテスクに見えて、科学の粋を集めた天文学史上画期的な新兵器だという実感がどうもわいてこない。昔は私も天体望遠鏡に凝ったことがあって、各種のものを作つたあげくハイソチ反射赤道儀を自作しようとして設計し、部品類を発注しながらも途中で中止したことがあった。土地の悪気流によりシーイン



●パロマー天文台をバックにして。

グ不良で、製作しても無意味だと考えたからである。

そんなことを思い出しながら、うろついていると、右手の奥に売店があるのに気づいて近寄ってみた。天体写真集などを売っている。買おうかなと思っているとステイヴがカウンターの前に立っているのが眼についた。彼が私にギフトとして買ってくれるのだなと直感した私は二重になってはいけないと思い、離れていると、果たして彼が包みを手にして近づいて来た。これを持って帰れと言う。感謝して受け取ってから外へ出た。

観光客が続々と詰めかけて来るが、その光景は日本の観光地と全く同じで、若いカプル、子供づれの夫婦等が物珍しそうな顔をしてやって来る。小さな男の子を肩車にして来る男もいる。いずこも同じだなと思ったが、一つだけ相違点に気づいた。カメラを手にした人がほとんどいないのだ。たまたま携行していても安物のポケットカメラで、日本人のような高級一眼レフをさげている人は全く見当たらない。

「なぜアメリカ人はカメラを持たないんですか？」とステイヴに尋ねると「理由はわかりません。アメリカ人であるあなたがたのような高級カメラを持つ人はごく少数です。彼らはもっと別な趣味があるんじゃないでしょうか」と言う。

そこで

「日本人は写真好きで観光地へ行くとはとんどの人がニコン、ペンタックス、キヤノン、ミノルタというようなカメラを持っていてあらゆる物を撮影します。そ

の理由は私にもわかりません」と話すステイヴが大声で笑い出した。

一同がもと来た道を引き返すと、ぞろぞろとやって来る見物人とすれ違う。向こうから中年の婦人が何事かをわめきながら歩いて来る。先頭を歩いていたフレッドが振り返って私に話しかけた。

「あの婦人がね、遠くからドームを見ると、まるで火星から来た宇宙船みたいだと言っていますよ」

二人は顔を見合わせて笑う。天文台で働く職員の住宅群が右手に見える。

駐車場へ出てまた車に乗り、帰路についた。約二時間かかってビスタのフレッドの家に着く。すばらしいドライブだった。

奥さんのイングリッドが笑顔で迎える。これからどうするのかとフレッドに尋ねると、映写機類を車に積み込んで一緒にアリスの家へ行き、全員でディナーパーティーを開き、そのあと映画を見せるから、準備するまでここで待てと言う。私はガレージ内の製作中の飛行機のそばへ近寄った。木製の可愛い低翼単葉機になるらしい。戦争中、日本の陸軍航空隊にいて爆撃機の整備部隊にいたと話すフレッドが俄然活気づいて、製作中の家用機の説明を始めた。設計図を持ち出して徹に入り細を穿つ話をする。こんな物で大空が飛べるのかいなと思うほどチャチに見えるが、自信満々らしい。どれくらいの費用を要するのかと尋ねると約二千ドルだと言う。ひとしきり航空関係の話が出て、もう戦争のことは思い出したくない、あまりに悲惨だったから

と言うと、全く同感だと答える。家の中から息子のグランが大きな映写機を持ち出した。これで映写するの？と尋ねると、自分が操作するんだと誇らしげに答える。しっかりした男の子だ。準備ができて一同は二台の車に分乗した。イングリッドは金色の胸飾りのついた白いドレスを着て盛装しており、すばらしいスタイルだ。可愛いエリシアも晴れ着を着てそばに座っている。

最後のディナー・パーティー

車はやがてアリスの家に着いた。大勢の人が集まってきた。フレッドとその甥だという初対面の小柄な青年が台所へ入って料理の準備をしている。この青年も優秀なシェフ（料理長）として働いているのだとアリスが説明したが、紹介はされなかった。したがって名前はわからない。広間で暫時少憩してステイヴやアリス、イングリッドらと雑談していると、フレッドがやって来て、今晚のご馳走は七面鳥の肉だと言う。私ははいねいとお礼の言葉を述べた。こんな場合日本式に「そんな事までしなくても……」だの「お構いなく」とか言っても全然通用しない。喜びの表情を浮かべる方がよいのである。

準備ができて一同着席する。今夜のホスト席にはフレッドが座り、来賓席には昨夜どおり私が着いた。すぐ右にイングリッドがいる。美しい横顔をチラチラ見ながら食事する。一流のシェフ二人が腕によりをかけての料理だから拙かろうは

ずはないが、こうした公の席に出ると食の私はますます食欲が減退する。肉をほんの少し食べただけで満腹となり、あまり喉を通らない。私が半分も食べないうちにイングリッドはすっかり平らげている。集う人々はフレッド夫妻、グラン、エリシア、甥のシェフ、アリス、マリーサ、ステイヴ、それに我々日本人二名である。昨夜会ったエイドリアンの子が見えない。やっぱり怒ったのかなと思いい、気になって仕方がないが、尋ねてみる勇気もない。

大勢の会食だからみんなが雑談に花を咲かせる。エリシアのお行儀が悪くなる。フレッドがその都度やさしく注意して矯正する。ひとしきり食べた頃、フレッドが私に向かって「もっと肉を食べませんか」とすすめるので、「いや、もう十分に頂きました」と答えると、一同が一斉にドッと笑った。ハテナ、私の英語が間違っている筈はないのに、なぜ笑ったんだらうと一瞬あつげにとられたが、別段嘲笑の響きでもない——この人々は他人を嘲るような人たちではない——いくら考えてもその理由がさっぱりわからず、なにかしら「謎」の多い家だと思いいながら一服やっている、そばからイングリッドがまた転生の問題を語り始めた。

ちなみにこの「笑い」の謎を後日ニューヨークで宮内温夫氏に話すと、よくはわからないが、アメリカではクリスマスマスのディナーに七面鳥をよく食べるので、食傷気味になり、余った肉をもてあますことがあるから、それを連想して皆がお

かしがったのではないか、ということだ。そういえば、食事が終わってもテーブル上に大きな肉のかたまりが残っていて、これをどうするかとフレッドやアリスらが思案していた。

イングリッドの話は延々と続いて、まともな深遠な宇宙哲学を展開する。しかし時間がきたので一同は広間へ移動してまずスライドの映写が始まった。グランが映写技師で父親のフレッドが弁士役である。父子でUFOの啓蒙活動に専念する姿がひどく美しく見えて胸が熱くなってきた。

映写されるスライドはアポロ計画で月に降りた宇宙飛行士が撮影した写真を主体としたもので、月の大気圏らしき光の帯状の光景、UFOの基地とおぼしき人工建造物らしい物、緑地帯等、初めて見る写真ばかりで驚くべき内容である。フレッドの解説の声だけが暗い室内に響き渡る。他の人々は何度も見ているのだろうが、熱心に画面を注目している。

スライドが終わって今度はアダムスキー撮影の円盤映画とフレッドが撮影したフィルムを写し出す。樹木の上方を金星型円盤が木の葉運動をくり返しながらいでいるかと思えば、銀色の物体が矢のように降下する場面もある。これが終わると次は映画「地球が静止する日」となる。最初のあたりを見ていると、たしかに昔日本で公開されたのを鑑賞したような気がする。筋は簡単なので英語の全くわからない人が見ても大体の意味はつかめるだろう。ところが途中で疲れが出て少し眠り込んだので、悪いことをしたと

思ったが、みんなは気づかなかつたらしい。

映画が終了して室内は明るくなり、フレッド父子は機械を片づけ始めた。いよいよ別れの時が近づいてきた。ここで一同記念撮影をすませたが、挨拶をする機会をうかがうのに、アリスは奥のソファに座ってイングリッドとしきりに話しているの、容易に切り出せない。フレッドたちは機械を運び出したりして帰り仕度をしている。ええい、とばかり思いきってアリスの所へ近寄り挨拶を始めた。

「いろいろと有難うございました。たいそう楽しい日々をすごすことができました。このことはいつまでも忘れません。どうぞ気をつけて下さい」

するとアリスが急に涙を浮かべて弱々しい声になった。「あなたも気をつけて——」とか何とか言っているが、よく聞きとれない。固い握手をかわしてから、次にマリーサの所へ行き、同じような言葉をくり返して「マリーサ、あなたは年だから、よく気をつけなさいよ。来年また来るかもしれないから、それまで元気でいて下さい」と言う、マリーサは微笑しながら「良い旅になるように」と言葉少なに答えたが、頬に涙が流れていた。会うのはこれが最後だと思ったのかもしれない。私もひどく感傷的になったが、女々しい態度を見せるのは日本男子の恥だとはばかり、虚勢を張って出て行った。車に乗る前にもう一度ドアーの方をふり返り、家屋の外観をしっかりと見定めた。



●最後の記念撮影。左からマーサ、瑛、スティーヴ、イングリッド、フレッド、アリス、久保田、(前列左から)ゲラン、エリシア、フレッドの甥。

いったんフレッドの家まで行き、機械類を下ろしてから、ホテルへ向かう。深夜の町を飛ばしてホテルの裏手の駐車場へ着いた。あたりは静まりかえって、物音一つしない。車を降りてから、数分間立ち話をする。フレッドとスティーヴが来年は日本へ行ってみたいと言う。ぜひ来てくれと答えてから握手をかわして私たちはホテルへ入って行ったが、そのときスティーヴが特に話したいことがあると言って私の部屋までついて来た。フレッドは外の車の中で待っている。

何事ならんと彼を部屋に招き入れて椅子に座らせ、私たちも座った。神秘的な彼の風貌がますます神秘的に見える。少時沈黙の後、彼はやおらポケットからある品物を取り出して説明を始めた。それは実にすばらしい物で、こちらが呆然となる有様だったが、彼はしばしウィーンと唸るよりほかなかった。

いよいよ最後の握手をかわして彼は静かに室外へ去って行った。私たちは無言のまま顔を見合わせて静かな室内でしばし黙想を続けたのであった。

(第二部終わり。以下次号)

× × ×

付記

今度の訪米旅行で痛感した問題が二つあった。記録写真撮影と語学である。本来この旅行は筆者経営の会社の出張であり、単なる観光ではないので、撮影は二次的なものであるが、GAP本部に立ち寄ってアダムスキー問題の調査を兼ねたために記録写真の撮影も重要な仕事となったのである。

当初から私はこれらの写真をすべてポジカラーフィルムに写してスライドを作成することだけに重点をおいていた。もしプリントが必要ならば帰国後にポジカラーからネガカラーへの複写を行い、それによってプリントを作ればよいと気軽に考えていたのだが、これが失敗のもとだった。帰国後に複写をやってみると色補正が困難で、どうしてもポジどおりの色が出ない。加うるにプリントが甘くなるし、プリント作成は散々な結果に終わった。これはむしろ逆をいって最初からネガカラーで撮影してプリントを作り、それをリバーサルに複写してスライドにすればよかったのである。なんとすれば、私たちが米国で撮影した写真の被写体は人間が多く、そのために後日大量のプリントを謝礼として米国へ送る必要に迫られたからである。

ところが、そうなると、ニッコールレンズが如何に優秀であっても、しょせん35ミリ判ネガカラーの画質は中判・大判カメラの比ではない。したがって4×5とまではゆかなくても(そんなカメラは手許にない)せめて会社で使っている複

写用のペンタックス6×7を携行すればよかったと大いに後悔した。私はニコンボディ二台にニコール35ミリレンズとニコールズーム80ミリ↓200ミリを装着し、他に複写用としてマイクロナックールレンズを携行した。その他に備品類を詰め込んだカメラバッグを肩から下げると重たくて仕様がなく、機動性のないことおびたらしい。しかも大型トランクという厄介物もある。超小型カメラで6×7判に劣らないほどの画質をもつ写真が撮れるような機材が開発されないものかなアと何度か歎息した。

フィルムは当初エクタクロームを使用する予定であったが、値が張るのでフジクロームを大量に持って行った。発色が危ぶまれたが出来上がりは上々だった。ただし前記のとおりあとでネガカラーに複写したので、本誌に掲載した写真のなかにはピントの甘いものもあるという結果になった。

次に語学の問題がある。この武器を持たずして海外の調査旅行は不可能だが、今回の旅行で日本人が如何に語学力に乏しいかを痛感した。高校や大学を出てもウンともスンともしゃべれない人が多い実状は日本の語学教育の誤りを如実に示している。本人たちのせいではない。英語教科書の内容が日常生活に密着していないからである。高校では分詞構文の書き替え練習をやらせたりするけれども、これは同一の意味を持つ文章を文語体と口語体に分類する作業であって、その事自体は重要だが、文語と口語の区別を教えないために、学生達ほとんどでもない英

語をしゃべったりする。「日本人の英語は口語と文語をこたまぜにし、米と英の語法をミクスし、そのいづれでもない発音でやっている」というのはかつての親友であった米人宣教師のロバート・カニングハム氏の言葉である。日本の大半の人の英語がメチャクチャなものだということの意味するらしい。私もその一人かもしれないので、重々注意しているが、日本で生活していると実態を把握するのは困難である。

Having heard of her husband's death, she began to cry. という文章

When she heard of her husband's death, she began to cry. という文章の内、前者を会話で口に出してしゃべったら、相手はこんな顔をするだろうと言つて眼を真ん丸にし、口を大きく開いて奇妙な顔をしてみせたのは、私の語学顧問である米人のD・マカラム氏である。つまりこれは文語体なのであって、しいて訳せば「夫の死を聞きし彼女は、泣き始めたり」というような文体に相当するものであらう。会話としてしゃべる場合は後者の英文の如く、副詞節に主語・動詞が含まれていなければならない。これならば「夫の死を聞いたときにネ、彼女は泣き始めたんですヨ」という対談用の表現となる。ところがこんな重要なことを解説した英語参考書に出くわしたことがない。かつて私が米系会社の翻訳部にいた頃、同僚の英国人ダイアナ・クック夫人に日本の有名な英語参考書や会話書をかたっぱしから見せて批評させたことがあったが、ほとんどダノだと断言し、

日本人の英語学者はどうしてこうまで本物の英語を知らないのだろうと、このロンドン大学英文科出身の才女は慨嘆していた。もつとも、この人は純正英語の擁護者を自任する誇り高き英国婦人で、アメリカ英語を方言だといって毛嫌にするほどのきびしい人だったから、よけいに日本人の英語が気に障ったのだろう。しかしアメリカ英語といえども今は大國の言語であるから、一つの独立した国語とみなしてもよいだろうが、これが西部と東部ではかなりの差があって、なかなか複雑なようだ。

生きたアメリカ口語を学ぶのに最良の小説はないかと尋ねたら、かつての知人である米人シスターのマーガレット・フランセス女史が、「ミンクウェイの小説がよいと言っていた。「武器よさらば」などが有益らしいが、私はまだ通読していない。第一、ただ読んだだけではダメで、全文を丸暗記しないと役には立たぬだろう。なぜなら日本で生まれ育つて、日本語で教育を受けた成年の日本人は骨のズイまで日本語がしみ込んでいるために、これを抜きにして外国語の語感が身につくわけがない。したがって外国語の学習は徹頭徹尾「暗記」以外の何物でもないのであって、暗記量の豊富な人ほど勝つのである。それも雑多に色々な英文を暗記するよりは、まとまった一冊の書物(英文原書)を丸暗記する方が有利である。しかも目標書物の内容によって分類し、小説なら「武器よさらば」、UFO物ならアダムスキーの「宇宙からの訪問者」の第二部、経済物なら何々と決め

ておき、正確な訳書と対照しながら英文をかたっぱしから丸暗記してゆくのである。これは非常に有益な方法であるからおすすめしたい。むかし日本の英学者で、すくく立派な英文を書く人がいたので、だれかがその秘訣を尋ねたところ、ステイヴンソンの「宝島」の英文を全部丸暗記して、それを土台にしているのだと答えたという。さもありなん、だ。ただしこの「宝島」の文体はすでに古くて現代英語とは異なるので注意を要するとはクック夫人の言である。

英語圏へ出かけて最重要なのはヒアリングである。相手のしゃべることが聞きとれなければどうにもならない。これがある程度できれば、こちらは簡単な応答ですますことによつて何とか会話は成立する。ところが一般の米人が日常話す言葉は、日本人には猛烈なスピードでしゃべっているかの如く感じられるのであって、聞き慣れないと何を言っているかわからない。しかし相手にとっては普通速度なのであり、しかも日本人だからといって殊更にゆっくりと話してはくれない。大意だけでもつかめればよいが、全く意味不明のままボカンとしていれば相手にされないだろう。したがって海外へ出かける前に十分に耳を慣らしておく必要がある。そのために各種のテープ付き語学教材が市販されており、これらはやらないよりはましだろうが、私が検討した限りではどうも満足すべきものがない。なぜか?

これらの教材は大体にスタジオでマイクの前に座った外人がテキストを読みな

がら録音したものであって、如何にもわざとらしく、白々しくて、感情がこもっていないのである。しゃべるスピードもわざと遅くしたものも多く、どだい日常生活の場の再現とは縁遠い。だから臨場感がないのである。ニューヨークあたり街頭で話し合っている米人たちの言葉は到底こんなものではない。実際に彼らが日常で話し合う言葉は大体に日本の中学の英語教科書に出てくる程度の単語を使用するくらいのもので、さほど難解な語を口に出すわけではないが、とにかくスピードが速い。そして日常生活に密着した「きまり文句」をふんだんに応用する。ところが日本の学校の英語教科書は日常生活とは縁遠い評論、小説、伝記などに満ちていて、なにか、日本人に英語をしゃべらせないような方向に持って行くようとしているかのように見える。数年前、慶大の学生達による自主的な英語学習会へ一年ほど指導に行ったことがあるが、そのテキストの内容たるや難解なることウンザリするほどで、十八、九世紀の英国の作品が出てきたりする。こんなものを学んだ学生の頭には何も残っていない。この連中がアメリカへ行って、発車間際のバスのステップに足をかけ、「このバスはニューヨーク行きですか」と運転手に向かって一気にしゃべれなくても本人の責任ではない。わけのわからぬテキストを学生に押しつけてケムに巻いている教授法に問題がある。したがって、しゃべれる英語をマスターしようと思えば学校などをアテにははいられない。自分で何らかの方法によりマスタ

ーしなくてはならないが、さりとてだれもかれも何年も海外に住んで現地人の中に溶け込みながら自然に本物の英語を身につけるほどの余裕はない。どうすればよいか？

ここに一つの方法がある。英米の映画の中で話される会話を録音したテープを繰り返し聞くのである。これはスタジオ録音の語学教材と違って、実生活で話される感情のこもった生きた会話そのものであって（厳密に言えばやはり俳優がスタジオで台本を読みながら録音するのだが）、これを聞けば現地にいるのと大差はない。話すスピードは日常生活の話し方そのものであり、あるときは怒り、あるときは笑い、ときに優しく、ときに叫んだりして、人間の感情をありのままに発露した会話である。こういうのを聞いて英米人の生活感情を汲みとることが先決問題である。

そんな録音テープを売っている所があるか？ ある。東京の南雲堂という出版社から「映画&英会話」というシリーズで英米の映画から録音したテープと英和対訳のシナリオをセットにして約十種類販売している。これを利用しないという手はない。まずシナリオに眼を通して文字の上で学習しておき、あとはテープを暇さえあれば反復聴取する。それこそ聞いて聞きまくるのである。最初は猛スピードでしゃべっているような感じがして戸惑うだろうが、繰り返し聞いているうちに次第に耳が慣れて、不可視の壁がくずれ、ついには日本語と同じように響いてくる。こうなると英語圏内一步突入

したことになる、俄然英語が面白くなってくるのである。エリザベス・テラーやポール・ニューマンらのしゃべる英語が、当初はさっぱり理解できなかったものを、いつしか日本語と同じように耳に響いてくるようになれば、ある程度米人なみの語感が身についたことになり、驚喜するようになるだろう。こうなると大学の砂をかむような英語テキストも親しく感じられるようになり、無意味でなくなってくる。とにかく、日常のコトバを音声から吸収してゆくことが最重要である。音を発しない印刷文字だけを何十年間ながめていてもだめである。

映画のテープを聞くといっても一日の内、わずか十分や十五分聞くだけでは効果はない。暇さえあれば繰り返し聞くことが肝要で、そのためには携帯用の小型テープレコーダーを一台仕入れて、それを終日手から離さないようにし、電車の中や歩行中もイヤホンで聞き、帰宅したらスピーカーから鳴りっぱなしにしておく。寝床の中に入っても眠り込むまで聞き続けるようにする。そして一本のテープ（約一時間分）を数十回、数百回と聞くのである。つまり自己の身边から英語の音声絶やさないようにして、英米の生活の雰囲気のみならずかもし出すようにするのである。このためのテープレコーダーという機械は素晴らしい武器となるのであって、これを利用しないのは大損である。携帯用のものでも安価ではないが、本物の英語の語感を身につけるために多額の費用をかけて海外へ行くことを思えば安いものだ。

ただしこの方法は多少とも基礎のある人が対象になるのであって、英語ゼロの人には向かないだろう。つまり、ある程度は英語（または英会話）を勉強したがある地点から先へはどうしても進めないという人にすすめる方法である。白紙状態の人はすぐに飛びつかない方がよい。やってみようと思う方は左記へカタログを注文すれば送ってくれる。

162 東京都新宿区山吹町二〇一、南雲堂

ことわっておくが、私はこの出版社と公私両面で全然関係はない。

また私自身が英語の達人だというわけでもない。それどころか年とともに記憶力は減退するし、多忙のために英米人の音声に接する機会も少なくて、力が低下の一途をたどっているために、何とかして力をつけようと思案するのあまり、私なりに実行している方法を述べてみた。万人向きではないかもしれないが、やる気のある人には効果絶大だと信ずる。つまり本物の英語を身につけようとする真剣に考えている人にすすめるのである。

内容のない日本式英語を得意になってしゃべりたがる人があるけれども、これはアメリカでは物笑いになるだけだ。そんな英語ならやらない方がよい。しかしブロークン英語でも話の味に深いものがあれば彼らは決して笑わないだろう。「日本人のしゃべる英語はブロークンだが、自己を失わないようにして話す人には好感がもてる」というのはマカラム氏が私に与えてくれたアドバイスである。

「生命の科学」で 重症の心臓病が 治った!

生きていくことの喜びを感じているのかもしれない。

これから紹介する婦人もそれと同様な体験を持ったものと思われる。おそらくこれを読まれる読者の中には、多少の相違はあるにしても似たような体験をお持ちの方が何人かいるだろう。しかしその記事の内容は、ある種の宗教団体が喜んで書きたてるような奇跡でもなければ、読者をして喜ばしめる類のものでもない。ただけ前置きして話を進めることにする。ただし次に紹介する婦人は、本人の希望により「Sさん」として本名は避けることにした。

とかく私たちは、日頃の忙しさのために、つい自分の体調に気づかず、健康であることを忘れがちである。が、いしてこう世知辛い世の中では無理もないことかもしれない。また中には「健康であることを忘れていることが健康である証拠なんだ」と言われる方もあろう。なるほどそう考えてみるとうなずける節も多々あるようだ。しかしこの考え方をもう少し深く掘り下げて考えてみると、どうも私たちは病気になるて初めて、以前の自分が健康であったことを身をもって知るのではないだろうか。現代に生きる私たちは、だれといわず持病の一つや二つはもっているものである。顔のニキビに悩む方もあれば、足の水虫に己れの足をみずから踏み付けずにはいられない方もあろう。

だが、生死を危ぶまれた人にとってはおさらのこと、だれしも自分が健康であったことや健康になれたこと、そして

Sさんは、現在五十四歳。ふだん私たちが一歩家を出れば、道ですれちがうこともある。「おばさん」——そんな感じのする人である。東京生まれの東京育ち、根っからの「江戸っ子」といったところ。今は四人の子供に囲まれて生活している。趣味は読書と書道、音楽を聞くことも好きという。近頃では、近所の人々と連れ立って旅行にも行くらしい。最近買ったばかりのカメラをもって——。そしてこのSさん、大のUFOファン。UFO専門誌の「UFOと宇宙」は創刊号からの愛読者。もちろん私たち同様、日本GPAの会員でもある。東京で開かれる月例研究会にも何度か参加したことがあるほどのアダムスキー哲学の良き学び手でもある。実はこのことがこの婦人を健康にさせた原因なのである。

病弱なこのSさんはこれまで何度となく入院している。三年ほど前には、長

年の過労から低血圧、狭心症(心臓の筋肉に血液を送る血管の循環が悪くなる)などの病状で医師から急きょ「死にたくなければ急いで入院せよ」と宣告され、二カ月間の病院生活を体験している。この苦しい病院生活の中で学び取ったのがアダムスキー哲学だったのである。今までも自分の病弱なるをもって幾多となく宗教をかじっているが、「経文を百万べん唱えれば救われる」などと言われてその気になっても、どうも奥歯に物がはさまったような矛盾を感じて半年と続かない。病弱な体も一向に良くならないというのがSさんの言葉。

それが知人から借りた「空飛ぶ円盤同乗記」の長老の話の部分を読んで興味をわき、その後、次々とアダムスキーの著書を読み続けた。「生命の科学」などはすでに八回読み直し、そのたびに感激を新たにしている様子で、大変に熱心な研究者でもあるためか、Sさんの言葉を借りると、最近では体調が非常によく、心臓病の方も大変に良くなったので、以前のような発作もいつしなくなりました。完全な健康状態の八十パーセントまでは回復したようである。これもみな「生命の科学」を日常生活に応用したお陰であるという。今では幸せな生活を送っている。近所の人にこのアダムスキー哲学を話して聞かせたいのだが、聞き入れてくれそうないないので黙っているのだとつけ加えている。

そんなSさんが、長年わすらった心臓病もすっかり良くなって、家事の仕事はもちろんのこと旅行を楽しむまでに健康

になったのは、以前には人一倍の心配性の性格だったものが、アダムスキー哲学の実行によって、その性格が一変したことが要因だろうという。つまり後天性の心臓病などというものは心の持ちようであるのであって、「生命の科学」の一六頁に出てくる「意識と心が等しく釣合を保って融合すれば、人間は自己の肉体を完全な健康状態に還元できます」という箇所が適合するのかもしれない。このSさんの体験はほんの一例にすぎないだろうし、類似の体験をした方は多数いるだろう。今日はこのようなすばらしい体験をした婦人が日本GAPの会員の中にいることを記してみた。(菅原史崇)

△編者付記▽

「生命の科学」を読んで実践すれば如何なる病氣でも治ると言えば新興宗教じみているが、本来肉体の故障は本人の想念によって正常化するのが当然であり、少しも不思議ではない。おそらくガンでも治すほどのパワーを持つのは人間の強烈な信念を伴う宇宙の想念であり、これ以上の妙薬はないだろう。肉体細胞は生きた実体であり、独立して「心」を持つからには、「正常になれば」という強力な思念に感応するはずである。肉体を創造した「宇宙の意識」は肉体を完全無欠な状態に維持しようとしているが、人間の習慣的想念はひどくゆがめられており、このために肉体にもゆがみが生じるのである。したがって「心」が内部の「意識」に同調して、ゆがみ(病氣)の想念を無にすれば全治するのである。

ユニバースUFOシリーズ第2弾!

4月12日全国一斉発売!

米ジョージ・アダムスキー財団より翻訳合本出版権獲得

ジョージ・アダムスキー著 久保田八郎訳

宇宙からの訪問者

—偉大な惑星人との会見記—

改訳合本決定版

●B6版342頁／本文厚手上質ク
リーム紙使用／写真頁極上コー
ト紙使用／美麗カバー付保存版
定価1,300円 円160

●空飛ぶ円盤は実在する! 遠い惑星から偉大な進化をとげた人類が大宇宙船を駆って地球の救援に飛来する! 壮大きわまらない宇宙空間の大スペクタクルと驚異的事実を伝えた本書はまさに20世紀最大のドキュメントであり、UFO研究者のみならず全人類必読の永遠の古典である。

●本書はかつて「空飛ぶ円盤実見記」・「空飛ぶ円盤同乗記」として知られた名高い2点の記録書をアダムスキー研究者として著名な久保田八郎が流麗平易な訳文により全面的に改訳、「実見記」の内、アダムスキーの手記と「同乗記」全文を合本として事件の理解を容易ならしめ、また未発表の写真類を加え50点以上の写真・図解を一挙掲載した。なかでも金星人オーソンの肖像写真、金星のシンボルマーク2点、その他の貴重な写真類は読者をして遙かなる惑星群に限りなく憧憬と畏敬の念を抱かせるだろう。

株式会社ユニバース出版社・業務部

〒110 東京都台東区上野5-1-6 ヤマトビル ☎03(832)1341(代表) 振替・東京 1-119478

●書店にない場合はユニバース出版社業務部へ直接ご注文ください。

全国書店で絶賛発売中!! ★ ★ ★
 《ユニバースUFOシリーズ》第1弾!

海外の著名なUFO関係図書をUFO問題に精通した名訳者の集団による流麗な日本語版として全国UFOファンに贈る《ユニバースUFOシリーズ》。以後続々刊行の予定。

私は円盤に乗った! 驚異のホワイトサンズ事件 ¥750
 〒160
 ダニエル・フライ / 久保田八郎訳

(付録)宇宙人アランのメッセージ/進歩の曲がり道/原子・銀河系・理解
 ダニエル・フライ / 藤間弘道訳

1950年7月4日夜、米ニューメキシコ州ホワイトサンズのロケット実験場に突如一機の円盤が着陸し、内部から響く不思議な声に誘われて乗り込んだ科学者フライは、ニューヨーク上空までを30分間で往復する! その間、円盤の推進法や宇宙人の故郷と超絶した科学、哀れな地球の現状等を知らされるといふこの驚異的事実物語は、本誌第2号に掲載されて当時の読者を熱狂せしめたが、いま新装なった単行本として同著者によるすばらしい関連記事3篇をあわせ収録し、あらためて読者に贈る! UFO研究者必読の書。

パプア島の円盤騒動 宇宙人の劇的出現事件 ¥750
 〒160
 ノーマン・クラットウェル神父 / 増野一郎訳
 F・ラガルト / 久保田八郎訳

(付録)フランスの怪奇・火の玉UFO事件 / 多条光線を放つ円盤
 ゴードン・クレイトン / 久保田八郎訳

ニューギニア島パプアで1959年に一大UFO出現ブームが発生した。島内の各所に円盤が低空で降下し、堂々と姿を現したが、特にポイアナイにおける出現は劇的であった。地上数十メートルの位置に停止した円盤の上部から数名の“人間”が、歓声をあげて手を振る島民たちに手を振ってこたえる。この驚異的事実を現地在任のクラットウェル神父が徹底的に調査報告し、大事件の全貌を克明に伝えたすばらしいドキュメント! 更にフランスで発生した世にも不思議な「火の玉UFO事件」と「多条光線を放つ円盤」の他4篇を掲載してUFO研究者必備の資料とした!

書店で入手できない場合は、直接当社へ現金書留か振替でご注文下さい。
 〒110 東京都台東区上野5-1-6 ヤマトビル 振替東京1-119478 ☎(832)1341(代表) **ユニバース出版社**

アポロ計画
 大写真集!

**MAN'S 人類の最大の冒険
 GREATEST ADVENTURE**

BRMセラー社版

月は何万年ものあいだ人類にとって到達不可能な神秘の世界でした。その月へ初めて人間を送りこんだ壮大な計画、奇蹟へ拓がる人類の偉大な第一歩となった大冒険それがアポロ計画です。本書は、アポロ1号からアポロ17号までの全計画を指揮したNASA(米航空宇宙局)提供による驚異のカラー写真119点、モノクロ写真11点によりあなたを未知の宇宙へご案内します。詳細な英文解説と別冊全訳日本語版がつきます。写真ファン、天文ファン、科学研究者にとり興味のつきない本書をぜひ一冊おそなえください。



米国直輸入

価格11,000円(梱包送料600円)



お申込みは 本書はユニバース出版社国内独占販売のため書店ではお求めできません。ご購入の場合は代金と梱包送料を現金書留または振替で直接当社業務部までお送りください。

5日間無料でごらんになれます!

この豪華写真集が5日間無料でごらんになれます。今すぐハガキで資料(無料)をご請求ください。写真集をごらんになりお気に召さないときはご返送ください。この場合は返送料のご負担だけで結構です。

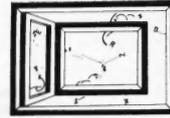
サイズ横25.5cm タテ34.3cm
 本文極上アート紙使用
 極厚手表紙・カバー付
 総頁数128頁

総販売元

ユニバース出版社

〒110 東京都台東区上野5-1-6 ヤマトビル

お問合わせは ☎03(832)1341 ユニバース出版社業務部まで。振替東京1-119478



□絵 月面の謎 アポロ飛行士が撮ったUFO写真初公開!

巨大円盤 基地の町横須賀に突如現れた大UFO!
燦然と輝く物体の内部に人影……? 8
本誌特別取材 **横須賀に出現!**

□ジャース声明の真相 異常な売名屋による大失敗! 19

UFOは地球の救済に来るのか 20
恐るべき大変動に直面しようとする地球を“UFO平和部隊”が目下パトロール? オットー・B・ワインダー

アポロの飛行士は月で地球外文明を見た? 26
中津要二

近世日本文学の巨匠西鶴が描く“飛乗物”とは?
井原西鶴の作品に現れるUFO 篠田弘史 30

中国上空のアダムスキー型円盤 田島 敏 34

三朝町のUFO出現騒ぎ 梶川 満 38
ダイヤのプローチ状に輝く謎の光体!

S・I(宇宙人)とコンタクトするにはどうしたらよいか!
奇蹟を起こす方法 44
テッド・オーウェン

■新しい物理学の夜明けを考える 狩野幽達 52
超光速粒子タキオンは存在するか

〈写真〉奈良県金剛山に現れるUFO 57

UFO目撃レポート 58 / UFO情報 66 / 科学ニュース 72

=円盤工学=負エネルギー操作 島中 宏 79

人体極性と重力場エンジン 唐沢宏之 80

ピーター・フルコスの B・アン・スレート
驚異的大発見! 81
オランダの生んだ世紀の大超能力者が各種UFO事件を100%透視した実話

〈写真〉小学生がUFOキャッチ 91

声—OPINIONS 92 〈表紙写真説明〉 アポロ飛行士の頭上にUFO! 96

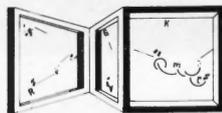
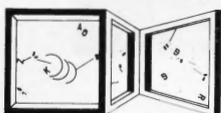
本誌既刊号掲載記事目次一覧 100



「小学生がUFOキャッチ(P91)」より

目次イラスト 松岡吉樹
本文イラスト 池田雅行

定価 390円



ユニバース出版社

〒110 東京都台東区上野5-1-6 ヤマトビル
電話(832)1341(代表) 振替東京1-119478

日本GAP月例研究会

高知例会

- 1、日時 毎月第一日曜日、午前十時より。
 2、会場 高知市棧橋通り二一―五五、「青年センター」
 電話(31) 4931。
 3、会費 一〇〇円。
 4、携行品 テキストとして「生命の科学」

★左記の方が四月より新潟支部結成を企画しておられます。近辺の方は足立氏宛ご連絡下さい。
 足立亘宏 新潟市五十嵐中島二九四三番地

大阪例会

- 1、日時 毎月第三日曜日、午後一時より五時まで。
 2、会場 大阪府吹田市出口町四丁目、「吹田市民会館」電話(388) 7351。国鉄または阪急電車「吹田駅」下車。
 3、会費 一〇〇円。
 4、携行品 テキストとして「宇宙哲学(たま出版刊)」「生命の科学(文久書林刊)」を持参。

東京例会

- 1、日時 毎月第二土曜日、午後二時より六時まで。
 2、会場 上野公園内「東京文化会館」四階会議室。電話(828) 2111。国電上野駅の「公園口」下車改札口の真向かい。会館正面に向かって左側の入口から入り、奥のエレベーターから四階へ行く。
 3、会費 二〇〇円。
 4、携行品 テキストとして「テレバシー(文久書林刊)」を持参。二時―三時「テレバシー」講義、三時―四時半「代表挨拶・報告・テレバシー練習・休憩、四時半―六時」自己紹介、研究発表、質疑応答。研究会終了後、同じ会場で希望者のみの夕食会を開催(食事代は各自持ち。一〇〇〇円程度)
 5、夕食会

日本GAPは左記のとおり東京本部、大阪支部、高知支部の三カ所で毎月「月例研究会」を開催して宇宙哲学の研鑽、UFO研究、情報交換、テレバシー練習、会食(夕食)等を行い、会員の精神的向上と親睦を図っています。近辺の方はぜひご参加下さい。出席者は会員に限ります。

●本年3月13日、東京文化会館における日本GAP東京月例研究会。



アダムスキー哲学三大名著 絶賛発売中!

スペースブラザーズから伝えられた宇宙の思惟法と宇宙的な生き方とを三部に分けて詳述。GAP 会員必携の書。注文は各出版元へ直接どうぞ。

G・アダムスキー 久保田八郎訳

宇宙哲学

¥ 750 千160

東京都新宿区納戸町33たま出版 振替東京94804

宇宙問題探求者必読の書

宇宙人から伝えられた人間の生き方を詳述
テレパシー ■ 生命の科学

ジョージ・アダムスキー/久保田八郎訳

¥ 450 千160 ¥ 550 千160

絶賛! アダムスキーの弟子でありコンタクトイでもあったフレッド・ステックリングのすばらしい体験記と哲学! 特に幼児教育について重要な示唆を与える。宇宙問題探求者必読の書!

★★なぜ空飛ぶ円盤は来るのか★★

フレッド・ステックリング/久保田八郎訳

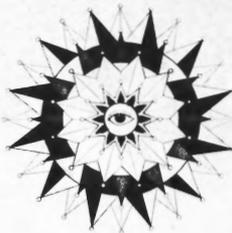
好評発売中! ¥ 650 千160

文久書林

東京都文京区白山1-29-12
振替・東京2521 Tel. (813) 2495



①



②

①オーソン肖像写真 ②シンボルマーク

①1952年11月20日、カリフォルニアの砂漠でアダムスキーが劇的な最初のコンタクトをした金星人は「宇宙からの訪問者」第2部でオーソンという名で出てくるが、これをア氏の記録やアリス・ウエルズのスケッチにもとづいて女流画家ゲイ・バッツが描いた名画の写真。(キャビネ判)(カラー写真)

②この金星のシンボル・マークの中央にある眼は“すべてを見透す眼”で、宇宙の意識をあらわし、周囲の四層の星は人間のマインド(心)の発達状態をあらわしている。(サービス判)(カラー)

上記2点共、スペース・ブラザーズとの一体化を図る上で重要な資料となるものです。他所では入手できません。ご注文は必ず日本GAP宛直接に振替でどうぞ。

① ¥ 500 千100 ② ¥ 200 千50 — 一括注文の場合 千100

編集後記

■気がせくばかりで遅々として進まなかった本号の執筆編集も四月に入ってからやっと完了し、ここに第58号をお送りできて、まずはめでたしというところで。勿論多数の会員の方々のご援助のたまものです。衷心よりお礼申し上げます。

■本号37頁の広告にありますように、ジョージ・アダムスキーの不朽の名著「空飛ぶ円盤実見記」と「空飛ぶ円盤同乗記」の改訳合本決定版が「宇宙からの訪問者」と題してついにユニバース出版社より刊行されました。これこそUFOと宇宙的哲学探求者の必読のバイブルです。GAP会員はぜひお読み下さるようお願いいたします。アダムスキーの深遠かつ壮大な体験が首尾一貫して展開します。

■「UFOと宇宙」第17号にはアポロ宇宙船が月面で撮影したUFO、基地、大気等の本邦初公開写真が掲載されています。これもお見逃しなく。

■41頁のお知らせのとおり、今回より金星のシンボルマークのカラー写真も頒布することにしました。ご愛蔵下さい。ただしオーソン写真やこのマークを無断で他誌へ掲載なさるぬようお願いいたします。

■先号で、本誌送料を一部一六〇円と予告しましたが、恐縮ながらこれは誤りで、一部送料は二〇〇円です。したがって会費一回分は本誌代三〇〇円共計五〇〇円となりますからご了承下さい。

■お願い! 本会宛の会費ご送金、その他のご注文の際は、当方の事情により絶対に現金書留にされないうで、必ず「郵便振替」でご送金下さい。振替だと到着するまでにかなりの日数を要しますが、確実に着きます。

■わが国唯一のUFO専門誌「UFOと宇宙」の発行所ユニバース出版社は四月一日より左記へ移転しました。

〒110 東京都台東区上野五―一六、ヤマトビル。新電話番号(三三三四二八代)三

(旧所在地は台東区秋葉原三三三) アキバビル)

■四月の東京月例研究会の日は上野公園でお花見パーティーを舉行する旨を三月の例会で予告しましたが、編者経営のユニバース出版社の移転騒ぎ、本号の発行準備その他で多忙のために不可能となりました。深くお詫び致します。

■それにしても忙しいですなア。連日連夜馬車ウマの如く動き続け、この頃は「我はヒトカウマカ」という状態で、郵便物の処理も停滞しがちで迷惑をかけており、申し訳ございません。

■好評連載中の「米国GAP訪問記」は次号で完結します。本号同記事でおわかりと思いますが、アダムスキー問題の背後にはかつての米政界の物が関連し、ア氏のコンタクトをめぐる陰謀と策略の一大ドラマが展開していたのであって、こうした恐ろべき内幕を全然知らない日本のアダムスキーらしい人達がインチキダトリック写真だと騒いでいるのは他愛ないものです。

■本号ではスペースの関係で御寄付名簿を省略させて頂きました。ご協力で深謝します。住所変更届けの際は、必ず旧住所と新住所に会員番号を併記して下さい。番号不明の方はハガキで二報下さればお知らせします。

GAP ニュースレター 58号

編集発行人 久保田八郎
発行所 日本GAP
〒133 東京都江戸川区本一色町365-818
振替東京4-355912 久保田八郎名義

頒価3000円・送料2000円

Apr. 30 1996